
龍の逆鱗

銀狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の逆鱗

【コード】

N0606Y

【作者名】

銀狼

【あらすじ】

小さな島国『大和』で忍となるために修行を積んできた少年、東龍斗。使いを頼まれて船旅に出たが、海上で嵐に遭ってしまう。気付いたとき、龍斗の前に現れたのは死んだと思われていた人物。辿り着いたのは、祖国の常識では計り知れない「異世界」だった。その先に、一体どんな運命が待っているのか……

第1話：四十九日明けて

季節は夏、山の木々は新緑に染まり、空には雲一つない青空が広がっている。東龍斗あずまりゆうとは一人山道を歩きながら、日光を透き通す木の葉などを何の気なしに眺めていた。島中を歩き始めたのは約二ヶ月前だが、その時とはすっかり景色が変わっている。時折聞こえる野鳥の声に、あの鳴き声はなんとという鳥だったかと思いを馳せる。だが今回はその思考を遮られた。

「よう龍斗」

「……何だ、遠矢か」

立ち止まった龍斗の前には一人の少年がいた。年齢十五、龍斗と同じ年に生まれ、同じ道を志してきた友人の一人、宮原遠矢みやはらとあや。突然声を掛けられたことで素早く身構えた龍斗だったが、黒髪に茶色い目の相手を認識すると警戒を解いた。それを見た遠矢は苦笑した。

「ははは、相変わらずだなお前は。家もそうだけど、生粋、ていうのかな」

「当たり前だ。いつ何が敵になるか分からんからな。とはいえ二ヶ月近くまともに動いてなかったら流石に駄目だ。気付くのが遅れたし、気が散ってた」

ため息交じりに首を横に振る龍斗。それを見た遠矢も一つ息を吐いた。嘆息ではない。寧ろ安堵あじむした様子である。

「安心した。龍誠殿りゅうせいが亡くなった後大分落ち込んでたからなあ。心配して損したぜ」

「そりやどうも。まあ四十九日も終わつたし、今日からまた修行を再開するつもりだ」

「……大丈夫か、本当に？」

心なしか暗い声色の返答に、遠矢が念を押す。

「大丈夫だよ、なんのための四十九日だ。じゃな、俺行くわ」

龍斗は笑いながらそう言うと言いつつ山道を降りていった。後に残された

遠矢はその後ろ姿を見ながら呟く。

「……こつちだつて忍を目指してる身だ。目が笑つてねえことくらい分かるつてんだ馬鹿野郎」

龍斗の目を思い出しながら、それでも彼を追いかけることなく山道を進んでいった。

龍斗の家は忍としてそれなりに優秀な家であった。祖父の龍誠、父の遼しゅういちもまた忍として働いていた。物心ついた時から忍に憧れ、忍の道を志すのは自然なことだった。

山を下りた後、自分の家の前を通り過ぎて大通りに出た龍斗。町の人々はいつものように商売をしていた。お客様は神様だ、という精神で誰に対しても丁寧な、円滑に会話を交わしている。

(けどこれも、一度豹変したことがあったな)

龍斗は思い出した。街行く人々の目は黒か茶色。だが龍斗はそのどちらでもない。一見すると黒に見えるのだが、近くでよく見るとそれは青みがかかった深い色、藍色であることが分かる。それは別に問題ではなかった。だが彼の母親の存在が問題だったのだ。この街にとつては、母が異質だったのだ。

異国から流れ着いたという母はこの国にはない金髪、青い目を持つていた。その後家族全員で村八分を受けた。人は異質を排除しようとする。それが分からなかった龍斗はただ悔しさに涙を滲ませた。父と祖父の口論が記憶に残っている。真剣を持つての死闘が繰り広げられたことも覚えている。時間が経つて母という人間が理解されていくと村八分もなくなった。

龍斗はいつの間にか左手で片目を押さえていることに気付いた。軽く首を振って歩き続け、目的地に到達する。

そこは修行場と呼ばれる場所で、何も無い広場で何人も人が手

合せを行っているのが見える。それを横目に、龍斗は一つの小屋に辿り着いた。玄関先に立っていた人に名を名乗る。

「東龍斗です」

「おお、待つとつたぞ。この度はその」

「もういいですよ、その挨拶。聞き飽きましたから」

「……そうか。なら早速じゃが一つ頼まれてくれんか」

龍斗と話していた人物、藤堂源二は一つの手紙を取り出した。見た目はただの杖をついた老人だが、かつては忍の最高位にいたこともあるという人物である。師範として若き忍を育てる今もその力は衰えていない。杖もただの杖ではない。中には鋭利な刃が隠されているのだ。性格もそれに似たようなもので、穏やかで気さくな所もあるが、忍という道に関しては一切妥協を許さない。自然災害など致し方ない障害に阻まれた時も情を捨てて忍を辞めると切り捨てる、厳格な性格である。そのふるいにかけられて忍になることを諦めた人間が多くいることを龍斗は認識していた。

「この手紙を御蔵島の時田さんとここに届けてほしい」

「分かりました。出来るだけ早く届けるようにします」

「ほっほっほ、まあそんな急ぎでもない。他所の島の様子でもゆっくり見てくるがいいさ。それが復帰第一号の修業じゃ」

源二はそう言って小屋へと消えていった。龍斗は首をかしげた。手紙の裏を見てみたり、日にすかしたりしてみるのが、特に変わったところはない。

結論が出たのは龍斗が自分の家に帰ってからだった。家にはもう誰もいない。その事実がきつかけだった。

（そうか、この島を出て、他所を見て気を晴らせと。藤堂さんらしい不器用なやり方だ）

口角の一端を上げながら龍斗は家に入った。

第2話：船出の時

翌朝、龍斗は一人旅支度を整えて家を出た。いつもの格好に、父の形見である太刀、祖父の形見である脇差を身につけて誰もいない大通りを闊歩する。今はまだ日の出前、よほどのことがない限り人は起きていないことはない。左肩に担ぐ麻袋には最低限生活に必要なものを入れた。母が作ったこの袋は二重構造になっており、袋の中にさらに小さな袋が付けられていた。大きさがちょうどよかったので手紙はそこに入れてある。路銀　旅に必要なお金のことだが有り金全てを持っていくことにした。何時何でどれだけ必要になるか分からないし、家に置いておいても得はない。寧ろ泥棒に盗られる心配がある。知らない間に盗られてました、より自分で持っていて賊に狙われる方がまだ救いがある。

（それに金は無くて困ることはあっても有って困ることは……あるな、やつぱ）

歩く度に音を立てる腰辺りに目をやる龍斗。そこにつけられた巾着袋には金、銀、銅で作られた貨幣が入っている。ここ玲角島、これから向かう御蔵島、その間にある徳間島以下数個の島からなる国『大和』で流通しているお金である。金が最高価値に定められているために物価が安定しやすいのだと誰かから聞いたことがある。それはいいのだが、問題が一つあった。貨幣とはいえ金属は金属。持つ金額が増えれば増えるほど荷物が重くなってしまうのだ。

（まあいいか、ほんとに盗られるよりはましなんだから）

道は大通りから横道にそれ、森の中へと続いていく。草木が生えていないその道を進んでいくうちに、磯の香りが強くなってきた。やがて森を抜けると、そこには白い砂浜と、赤く染まり始めた朝焼けの空、そしてその光を反射し白い波を立てる大海原が画面いっぱい

いに広がった。龍斗はそこから左に移動していった。やがて大きな小屋と棧橋が見えてきた。龍斗は小屋の前に立ち、扉を数回叩いた。海に出るにはこの貸船屋で舟を借りる必要があるのだ。

「はいよ……ああ、龍斗君かい」

眠い目をこすりながら戸を開けたのはご主人。巾着から銀貨二枚を取り出し男に言う。

「御蔵島まで行くから、出してもらえますか」

「へえ、そりやまた遠出だねえ。なら帆かけの方が良い……でも悪いな、金一、銀一になっちまうぜ」

「んー……まあいいですよ」

龍斗は巾着の中身を探り、金貨を探し出して主人に渡す。

「やっぱり舟は高いですね」

「まあな、他所の島に行くにはこれか自力で泳ぐかしないと。それと原因はやっぱり野分と鮫だな。あれに出くわした舟がぶつ壊れたり、かなりの損傷受けたりで、もう修理代が馬鹿にならん」

神妙に頷く龍斗。実際彼が覚えているだけでもかなりの数の舟がその被害にやられている。一部が割れて沈没しかけていた時もある。見送った船が木片と化して帰ってきた時もある。被害にあうのは舟だけではない。それに乗っていた人間も、なんとか無事に帰ってくる者、波に襲われ溺死した者、舟ごと行方不明になったままの者もいる。その中には龍斗の親族や友人も含まれている。そして彼は今後そうなる可能性のある人物である。決して他人事ではないのだ。

棧橋に出て待っていると主人が舟を出してきた。中央には一本の柱が立っており、折りたたんだ白い布がその下にあった。龍斗は主人と共に舟を後ろから押していき、海に浮かべて乗り込んだ。

「風があつたら帆を張つとけ。艫かやかい權けんで行くより楽だからな。何かあつたら近くの船屋に寄れ。舟つてのは組合で共有してるもんだからどこのどの舟でも一緒だ」

わかりました、と返事をして舟の後ろにある艫を漕ぎ始める龍斗。手を振って見送ろうとした主人だったが、手を挙げようとした瞬間

あることに気付いて龍斗に叫ぶ。

「おい！！」

その声に反応した龍斗が振り返ると、何か光るものが飛んでくる場所だった。思わず掴みとったそのを開くと、龍斗の目は皿のようになくなった。投げられたのは自分が支払った銀貨。何故これ？ その疑問を口にする前に、投げた本人が声を張り上げた。

「進水式代わりだ！！ 生きて帰ってこいよ！！ 良い旅を！！」
思わず笑みを浮かべた龍斗。大きく手を振っている主人に手を振り返し、龍斗はまた櫓を漕いだ。

いつの間にか空には白い雲が浮かんでいた。龍斗は人差し指を立てて唾をつけ、目線の高さを持つていった。風が当たるとそこだけ冷気を感じる。こうして風向きを把握した龍斗は、次いで進行方向を確認した。出発した玲角島は後ろ、太陽は少し高度を上げたもののまだ東にある。そして前方に小さく見えるは中継地点の徳間島。その島の船屋にこの舟を任せ陸地を移動、反対側の船屋でまた舟を借りる。そしてようやく御蔵島へとたどり着く。払ったお金は御蔵島までの往復にかかる料金である。いちいち支払いをしていてもいいのだが、まとめて支払うと幾らかおまけしてくれる。組合員による証明証を見せればこの方法でも問題はない。その証明証は麻袋の中、手紙と同じ場所に大事にしまつてある。

龍斗は帆を張ることにした。航路に対して追い風という絶好の機会を逃すわけにはいかない。白い布が上がると、それまでよりも速い速度で進んでいった。龍斗はふと振り返り玲角島を見た。既にかのりの距離を進んでいたが、まだ島は視認出来た。一つ息を吐くと心の中で島に語りかけた。

(暫く離れる。ま、すぐに戻るさ)

進行方向に間違いがないことを確認して、龍斗は舟に寝転がった。これが、龍斗が見る最後の故郷の姿であるとは知らずに……

第3話：極楽浄土か奈落の底か

何処だ、ここは……

龍斗は薄く目を開けた。視界がぼやけてはつきりせず、色しか認識できないでいた。だがその色も白一色しかない、と思った瞬間に黄色い色が現れた。青い点が現れたと思うと、すぐに振り返って何を叫ぶ。

(……ん?)

龍斗はそこで違和感に気付き、数回の瞬きをした。視界がはつきりした瞬間、龍斗は文字通り跳び起きた。その勢いそのまま裏をついて体を起こし大きく跳躍、着地と同時に片膝をついて振り返った。突然のことに啞然とした様子の男女がそこにいた。藍色の鋭い目が二人を捉え即座に判断する。

(立ってる男は茶色の髪、特に武器は持っていない。座ってる女は口元に手を当てている。髪は金で目は青い……ん？ 青眼金髪?)

龍斗が眉を顰めたのと、新たな人間が入ってくるのとはほぼ同時だった。

「目覚ましたって!？」

「ホントに!？」

声の主に目を向けた龍斗は顔を認識した瞬間に驚愕した。普段は滅多に素の表情を見せない龍斗だったが、この時ばかりは違った。

「連、それに、霞……ああ、そういうことか。で、ここはどっちだ。極楽浄土か、奈落の底か」

一人納得する龍斗の言葉を聞いた二人は顔を見合わせる。その後しばらく暫く二人の笑い声が部屋を占めることとなった。

「いや悪かったよ。あんな真剣な顔で言われたらさ」

「目が覚めたら死んだと思われてた人間がいる。死んであの世行き

を考えて何が悪い」

「あーひどーい、あたしを勝手に殺さないでよー」

「大和じゃもう死亡扱いになってるっつーの。行方不明になってから何年経ったと思ってるんだ」

気分が落ち着いた龍斗は今自分が寝かされていた寝台に座り、後から入ってきた二人　烏丸連からすまれんと斉藤霞さいとうかすみを相手に話をしていた。二人とも龍斗と同じ国で生まれ育ってきたが、何年も前に行方不明となり、国内では既に死亡したものと看做みなされていた。だが今こうして目の前で生きている。夢でないのは、傷む左足が証明していた。そのことを問うと連が丁寧に教えてくれた。

「龍斗はさ、舟に乗って海を渡ろうとしたんだよね」

「ああ、そうだ」

「で、突然の嵐　野分に遭った」

「ああ、そうだ」

「で、荒れ狂う波に襲われてるうちに気絶してしまい、気が付いたらここに流れ着いていた」

「ああ、そうなるな」

「俺たちも一緒なんだよ。普段なら全く問題なく渡れる航路を進んでいったのに、突然の野分、訳の分からない海流、進路の間違い、様々な原因を経てここに流れ着いた。そして助けられた」

「あたしもそうだよ、と。はい終了」

左足の包帯を取り換えていた霞が作業を終えて立ち上がった。

「悪い、ありがとな」

「どういたしまして、お兄ちゃん」

礼を言った龍斗だったが、霞の返答を聞いて背筋に寒いものを感じた。

(こ、こいつ……あ、そうか、こいつもあの一派の一員だったか)

霞は悪戯心に満ちた笑顔でこちらを見ている。一方の連からは疑問の念がひしひしと伝わってくる。ちっと鋭く舌打ちしたところで横から白い手が伸びてきた。

「仲がいいのね3人も。はい、どうぞ」

「あ、有難うございます」

それは最初から部屋にいた金髪青眼の女性だった。白い小さな器を受け取ると、両手から温もりが伝わってくる。湯気を立てている中身を見ると、同じく白い水のようなものが入っている。

「ホットミルクよ。体が温まるわ」

「ほっと……みるく？」

言葉に違和感を感じたが、他の二人は全く気にしていない様子で中身を飲んでいる。龍斗もそれに倣って器を口元に運んだ。

(……美味しい)

ほのかな甘みが口に広がり、熱が体の芯を通っていく感覚を味わう龍斗。そして、器の中身の正体にも気づいた。

「これ、牛乳か」

「そう、牛乳に砂糖を入れて温めてあるんだよ。大和にはないよねこういの」

霞が笑って返してきた。ホットミルクを半分ほど飲んだ後、龍斗はあることに気付いた。左手の人差し指を親指に引っ掛け、手に持った器の端を軽く弾くと、キンという澄んだ音が響いてきた。

「陶磁器の小さな器……これ、『コップ』てやつか？」

「正解よ、よく分かったわね」

渡してくれた女性がそう言った。龍斗は数秒目を閉じた。再び目を開けた時、彼の頭の中では気が付いてから今までに得た情報が整理され始めていた。

(舟による難破、漂流。過去に同じように流された奴らの一部が生きてる。馴染みのない調理、陶磁器製の器コップ。何より……金髪青眼、母の言葉)

「そうか、此処が……母が元いた世界、異国か」

まったく無意識のうちに龍斗の口から結論がこぼれ出た。

だが龍斗には一つ疑問に残ったことがある。連や霞は答えを知っているというので率直に聞くことにした。

「ここが異国なら言葉は通じないとかあるんじゃないのか、確か」
うる覚えの情報の真偽を確認する龍斗。今までの流れから考えて金髪青眼の女性は龍斗から見ると異国の人間。そして大和の者と大和の言葉を用いて会話をしている。自分も聞いて受け答えしたのだからこれは紛れもない事実である。だが彼女以外はどうかだろうか。もし方言のように言語の違いがあったらならどうすればいいのか。そう言ったところを聞いたのだ。

「ああ、それね。龍斗は聞いたことないか？ 今の和に繋がる系譜の国が遙か昔に全ての陸地を支配したって話」

「端的に言えば、それは事実でしたって言うことになるわね」
連の話を霞が締めた。連が言ったのは大和に伝わる有名な言い伝えのことだ。全ての陸を支配し、言葉も通貨も文字も、全てを統一したまさに天下一の英雄伝。最初聞いたときは眉唾物だったが、ここにきて何年も経過している彼らがそう言うのなら事実だったのだろう。彼らが嘘をつく利点もない。

「まあ文字は大和でも使う漢字ひらがな以外に、カタカナやアルファベットってのがこちら独自の文字としてあるんだけど。あと数字かな、漢数字じゃなくてアラビア数字使うよ」

龍斗は頷いた。幼い頃から異国出身の母によく言われていたことである。

「分かった。意思疎通については問題ないんだな。じゃあ次に……」

第4話：家族の形見、忍の名乗り

「じゃあ次に、俺の荷物は？」

「ああ、そのテーブルの上にある。ちよい待ってな」

連が椅子から立ち上がり、寝台の横にあつた棚のような物の所へ移動する。腰くらいの高さがあるその上に麻袋が置いてあつた。その台の横には太刀が立てかけてあるのも見える。そう、父の形見として持ってきたあの太刀である。

連が戻ってきた。椅子に座りながら龍斗に袋を渡す。

「はい、これ。一応中身確認して」

龍斗は言葉が終わる前に袋を開け、中身を確認していた。着替えの服、金の入った巾着袋、非常食の兵糧丸、中にあるのは龍斗が入れたものと同じ。極めつけは中にあるもう一つの小さな袋。

「お、この麻袋、ポケット付いてたのか」

どうやらポケットと言うらしい。龍斗はそのポケットから手紙と証明証を取り出した。手紙に書いてある差出人の名前は藤堂源二、証明証にもあの貸船屋の主人の名前が書いてあつた。何より、龍斗にとつて最も大切なものを見つけることができた。

「ああ、良かった……爺さん、母さん、美夜」

手に取つたのは形見の品。祖父が持ち歩いてきた脇差。妹の美夜が愛用していた簪^{かんざし}。母が首に巻いていた細い鎖。金貨のような色で輪になっており、真ん中辺りには貝を象^{かたど}つた飾りがついている。

「あら、ネックレスなんて持つてるの？」

「ん、どれも。おお、本当だ。異国にもあつたのかい？」

金髪的女性と茶髪の男性が母の形見を見てそう言った。

「これ、ネックレスっていうんですか？ いや、大和にはこんなものはありませんよ」

「じゃあなんで？」

男性が首を傾げた。存在しないはずのものを何故持っているのか。

当然の疑問である。

「母が持ってたんです。ここからは俺の想像ですが……恐らく母は元々こちら側の人間だった。だから、こっちにしかないものを持っていた。こっちの知識も知っていた。多分俺らとは逆に、こっちから大和へ流されたんだ。で、父さんと結婚して俺が誕生、そんなとこだな。それと連、霞が流された後ずっとこっちで暮らしていた事を踏まえると……」

注目する四人の顔を一瞥し、龍斗はため息をついた。

「やっぱ、大和には戻れないんだろっちなあ」

最後の推量に連が言葉を返した。

「多分、それであってると思うよ。実際こっちじゃ金髪青眼の人は多いし。ただ一つだけ訂正。確かにこっちから向こうに帰るのはほぼ無理だけど、向こうからこっちに来るのは案外難しい話じゃない」
「……どういうことだ？」

龍斗の目は連を捉えた。続きの言葉に耳を傾ける。

「あの辺には独特な海流があってね。トリトン海流っていうんだけど、その流れの方向が大和からこっちに向かって大きな渦を巻くように流れているのさ。それに乗って上手く離れられればこっちに辿り着くことができる。但し、あまりに深いところに乗ってしまうと渦から逃れられなくなって結末は沈没しかない。そして流れは一方通行だからこっちから大和方向へは行けない。極稀に別の海流とぶつかって流れが止まるっていう話もあるけど、それが起こるのは何百年に一回とか言われているし、都市伝説みたいなもんだと思ってた。けど」

「その何百年かに一回の海流に乗って、母さんが大和に来たと考えれば辻褄は合う、か。都合も運もあったもんじゃねえな」

いつ発生するか分からない海流に偶然遭遇し、異国の者を受け入れる父に出会う。奇跡としか言いようがない、と龍斗は思った。

「でも東君、海流に乗ってきちゃったんだよね。きつとご家族も今頃心配して」

「ばっ、おい!!」

霞の言葉を聞いて慌てて止めに入った連。だが話の肝心な部分は既に言ってしまったている。龍斗は苦笑した。その表情はどことなく陰りが見える。

「いいよ、連。隠したって仕方ない。去年のことだから、お前はまだいたけど、その前にもう霞はいなかったからな。家族は死んだよ。父、母、妹は土砂崩れに巻き込まれて、爺さんも二ヶ月ほど前、老衰で亡くなった」

「あ……ごめん……」

「マジかよ、龍誠殿まで……」

部屋を沈黙が支配した。見知らぬ男女も家族の死という話題で言葉を失っている様子。

「あ、でも、そう、だから俺は大和にはもう未練はない。帰ったところで何にもないしな。むしろこっちに来て良かったかもしれん。心機一転だな」

その笑顔は大和にいた時、宮原遠矢に見せた顔と同じだった。顔から相手の心情を読むという忍の修行を積んでいた霞だけでなく、その修行をしていない連や男女にも龍斗の本心は伝わってしまった。空気は部屋の空気をさらに空しくさせるといふ結果に終わった。

その後暫くして、連、霞は部屋を出ていった。ふと見ると、頭上に見える壁の一部に穴が開いており、そこから茜色の光が部屋の中に差し込んでいた。この家の主であるという二人組もいつの間にか部屋を出ていた。

龍斗は一人寝台の上で仰向けになっていた。だがその目はすぐそこに見える天井を見てはいない。

(何やかんや言っても、俺はこっちの世界のことを知らない。明日からその辺を学んでいくしかないな)

扉を叩く音がした。はい、と返事をすると金髪の女性と茶髪の男性が入ってきた。女性が両手で運んできたものをテーブルに置いた。どうやら食事のようだ。体を起こし、寝台から足を下ろして座る龍斗。

「はいどうぞ。あなたの分の夕食。ちゃんと食べないと回復は遅くなるわよ」

「すみません、色々世話になってしまって」

「はは、構わないよ。困ったときはお互い様、だっけ。そう言うんだろ、ヤマトでは」

男性の方が笑いながら言った。一瞬龍斗は目を見張ったが、すぐに戻した。考えてみれば自分が来る前から何人もの大和人が流れ着いていることだろう。言い回しが伝わっていても何ら不思議ではない。

「有難うございます。えっと……」

お礼を言おうとしてはたと気づいた。この二人の存在を認識してからかなり時間が経ったが、一度も名前を聞いていない。そのことに気付いた男性は申し訳ないといった様子で頭を掻いた。

「あ、すまない。あまりに楽しく会話してたもんだから、口をはさめなくてね。僕はトマス・デイビス。トマスが名前で、デイビスが名字ね。年は42歳だよ」

「私はベラス・デイビス。この人の妻よ。年は……あまり言いたくないけど34歳。よろしくね」

龍斗は素直に驚いた。見た目だけの判断では龍斗はもつと若いと思っていたからだ。しかし年齢判断は特に重要なことではないし、元より外すことの方が多い。なので今回も龍斗は判断の間違いを気にしなかった。

龍斗は立ち上がり、初めて男女を見た時と同じように片膝をついた。元々左足を立てる癖がついているので、体重を右足にかけると痛みはさほど感じない。正座や立礼も知っているが、足への負担を考えればこっちの方がいい。それにこちらでの礼儀はほとんど知ら

ない。故に自分が一番よく理解している忍の礼儀を選択したのだ。

「東龍斗……いや、リュウト・アズマ、齡十五。以後宜しくお願
い申し上げます」

第5話：「異世界」

木製の扉を開け放つと、そこは異世界であった。勿論^{もちろん}比喩的表現ではある。龍斗は海を渡っただけで世界を渡ったわけではない。だが目の前に広がる景色は、元いた大和と比較するとあまりにも違いすぎていたのだ。

快晴の空の下、雲を全て大地に引きずり下ろしたかのように街が白い。龍斗は2〜3段の階段を下りた。足元を見てみると床も地面が露出せず、何か敷かれてやはり白くなっている。降りきったところで後ろを振り返る。今しがた龍斗が出てきた建物も例外なく白かった。

そうして建物の壁を見ているとき、龍斗の第六感が何かの到来を知らせた。すかさずその気配の居所を探る。忍として生きるためにはどんな些細な変化でも見落としてはならない、その教えが身に染みているのだ。

（2人、1人は軽く走ってきてるか。多分……）

「霞だろ」

すぐ後ろにまで来た気配に、振り返らないままそう言った。気配の主はそれを聞いて身震いした。

「お、おはよう東君、な、なんで分かったの？」

「お前も忍目指してたんなら分かるだろう、つと」

言いながら振り返った龍斗は、霞が着ている服に驚き言葉を詰まらせた。桜の花のような色の袖が短い上着、足を見ると白い袴のよくなものをはいているが、その長さはかなり短く、膝まであるかないかというところ。履物も草履ではない。栗のような色をして、足全体を覆うような作りとなっている。

そうして観察しているうちに、さっき感じた内のもう一つの気配がすぐ傍まで近づいてきた。龍斗はまた姿を確認することなく正体を言い当てる。

「遅かったな連」

「おつ、いや、霞が勝手に走ってっただけだよ。後ろ向いてたから脅かそうってな」

「だと思った。脅かすのなら成功してるぜ、つと……お前らのその格好で」

霞の向こうにいる連に目を向け、またその格好に言葉を詰まらせる。連の格好は霞の色違いとも見える青い半袖の上着、下は二本の筒に足を通す感じの物をはいている。因みに色は黄土をかなり薄くしたような色だった。昨日会った時には全く気付かなかった、というより格好にまで気が回っていなかった。

「ああ、そうか。この上着はシャツ。下にはいているのはズボン」
「あたしがはいてるのはスカートだよ」

聞けばこちらではこの格好が普通なのだという。異国の神秘だ、と龍斗は思う。だが今はそれを学んでいかなければならない。目的地に向かう間、取り敢えず龍斗は根本的などころから聞くことにした。

「そついや昨日散々こつこつちて言ってたけど、ここつて何処なんだ？」

すると連は少し意外そうな顔をして口を開いた。

「小母さんから聞いてないのか。ここはランドレイク大陸って名前だよ。文字通り、大和とは比べ物にならないほど大きい陸なんだ」

「その中で最も東に位置する、つまり大和に一番近いのがここ、『商業都市国家オリジア』だよ」

途中から霞が説明に加わった。龍斗は記憶を辿ってみたが、母から大陸の名前を聞いた覚えは無かった。気を取り直して次の質問に映ることにした。

「やけに白い街だけど、これ建築資材は何だ？ 同じものが足元にも敷いてあるし」

「大陸の家は大抵が石造りだよ。木製の家もあるけど、大和にあつたような茅葺き、瓦屋根、漆喰とかは無い」

「敷いてあるのも石を加工したものだよ。その町の中で重要な道は大抵こうなってるね。例えば王様の住む城に続く街道とか。あ、ここには王様はいないよ。ここは商人達が統治してるから」

「へえ、商人がね」

「それもこれもここに経済の大事な拠点があるから……あ、着いたよ。ここ」

三人は石畳の街道の終着地点に来ていた。そこにあつたのは他の建物とは比べ物にならない程大きな建物。ただ大きいだけでなく、所々に曲線を描くように石が並べられていたり、壁石の表面が綺麗に磨かれていたりとかかなり手の込んだ造りがあり、この街の象徴ともいえる存在感を放っていた。その荘厳さに思わず唖然とした龍斗だったが、入口前の屋根を支える柱に気付いた。

「なあ、あの柱はなんで赤いんだ？」

「ああ、あれは煉瓦っていうの。土を焼き固めて作ったものだよ」
霞の情報によると、石の代わりに煉瓦を使って建てられた家もあるとのこと。その説明の後、霞は入口の上を指さした。龍斗もその方向に目を向ける。

「あれが銀行の印。^{マーク}黄色い大きな円に模様、つまり金貨を表しているの。で、その下にアルファベットでBANK^{バンク}って書いてある。分かった？」

「なるほど、絵で何の店が分かるのか。中々便利だな」

「ここで連が気になったことを口にする。」

「そう言えば龍斗、アルファベットの綴り読めるのか？」

「母さんが大陸の人間だったからな。小さい時から読み方と文字くらはいは教わってた。読みは自信がないけど……左からブ・ア・ン・ク、でバンクだな。なんとなく分かる」

「なら大丈夫だ、と連は笑みを浮かべた。彼は扉の持ち手に手を掛けると、ゆっくりと押して中に入っていく。龍斗、霞もそれに続い

て銀行の中に入った。

第6話：銀行の信用

中の様子を見ると改めてその広さを思い知らされた。壁際には5人が一度に座れるほどの長椅子が所々に置かれている。真ん中には木の台を横に長くしたようなものが3辺を囲い、その内側では異様に同じ格好をした男女が客の応対をしていた。

「空いてるカウンターは……あつた。行こう、東君」

霞に腕を引つ張られながらカウンターの一角に立つた龍斗。向かいにいた黒い上着の女性が事務的な声で応対した。

「いらつしゃいませ。本日はどのようなご用件でしょうか」

無表情で眼鏡の奥から睨むような視線を向けられた龍斗。だが龍斗にはその質問に対する答えを持っていない。お金を預けるといふ目的は伝えられているものの、具体的に何をすればいいのかまでは聞かされていないのだ。

助け舟を出したのは連だった。

「こいつの口座を新しく作りたい。今までに利用経験はない」

「かしこまりました。少々お待ちください」

どうやらこれが目的らしかった。去り際に、

「後は向こうの言うようにしてね。預金を忘れずに」

と耳打ちしていった。連に向けた視線を受付係に戻すと、ちょうど一枚の紙を出してきたところだった。

「ではまず、こちらの欄にお名前と年齢をお願いします」

龍斗は一本の鳥羽を受け取った。いつの間にか台の上には透明な容器と、金属のような光沢をもつ薄い板が置いてあった。中には黒い墨のようなものが入っている。

（墨と筆、か？）

その前提をもって龍斗は羽の先を液体につけた。垂れないように容器の端で余分を落とし、板に『東龍斗 15』と書いた。年齢は漢数字で書こうとしたのを寸での所で思い留まった。板を見せると

受付係は文字を確認し、再び龍斗に返した。

「申し訳ありませんが、漢字名の場合はフリガナをお願いします。読み方が特殊な場合などありますので」

納得した龍斗は漢字の上に『アズマ リュウト』と付け加えた。自分の名字、東と書いて『ヒガシ』ではなく『アズマ』と読ませるのは人名地名だけの特殊な使い方だからだ。

もう一度提出すると、

「アズマ リュウト様ですね」

と確認が入り、返却されることはなかった。続いて彼女が出してきたのは針山と奇妙な水晶。水晶の中では黒い砂のような粒が、水に流れるように渦巻いている。針山から一本の針を抜き、受付係が言う。

「では、リュウト様の血を提供して頂きますので、手を出して頂きますか」

「血、ですか？」

思わず聞き返してしまった龍斗。彼女は至って平静な声で説明する。

「はい。大陸全土のお金の動きを管理する場所なので、銀行と契約者の間には信用がなければなりません。その信用のために、血液を用いた契約を行います。銀行側は預かったお金を責任を持って管理すること、及び必要の際には融資、即ち銀行のお金をリュウト様にお貸しすることをお約束します。リュウト様にはその代償として、通貨の価値を疑わないこと、銀行を疑わないこと、また融資を受けられた場合は、定められた期限までに借りた金額に加え、その1割に当たる額を利息として支払うことが求められます」

龍斗は左手を出した。失礼します、と断った彼女が人差し指に針を刺す。一瞬の痛みの後に出てきた赤い液体を謎の板と水晶に垂らす。すると、板が血を吸収しているのか赤い円の範囲がみるみるうちに小さくなり、とうとう完全に無くなってしまった。同時に板が変色し、薄く緑がかった色になった。水晶の方は吸収される様子が

顕著だった。黒い粒子が渦巻く中に赤い血の粒子が混ざり合い、一瞬だけ白く光った。その光が消えると、元の黒い渦に戻り、赤は何処にも見当たらなくなった。

「これで契約は完了となります。お疲れ様でした」

指先に包帯を巻いた後、受付係は事務的な声でそう言った。続いて注意事項を述べていく彼女。

「融資を受けた後、一定期間以内にお金の返済と利子の支払いを済ませなかった場合、銀行口座は閉鎖されます。現金取引以外では一切お金を動かすことは出来なくなりますのでご了承ください」

「現金以外で支払できるんですか？」

「はい。基本的にはカード払いが主流となります。これはリュウト様が物を買った場合、銀行に預けられているリュウト様のお金が、相手の銀行口座に移動するというものです。リュウト様から見ると数字が増減するだけとなりますが、きちんとお金は動いています。但し商人の中には現金取引しか受け付けないという方もいらっしゃいますので、幾らかは現金をお持ちになった方がいいでしょう」

「どうやら大陸ではこの金属板　カードを使って支払をするのが主流らしい。感心しながらカードを眺めていると、突然手中にあったはずのカードが消えた。」

「……あの、カード消えちゃいましたけど」

「カードはリュウト様の体内に保管されます。支払いなどでカードを出す場合は『マイカード・オープン』と唱えることで出すことができます。逆にしまう場合は『クローズ』です。またこのカードは身分証明証の役割も持っています」

龍斗は試しに「マイカード・オープン」と唱えてみた。広げていた左手の上で光が弾け、先程のカードが出現した。そのことに感心していた龍斗は、次の用件を思い出し、慌てて受付係に告げる。

「預金つてどうするんですか」

「預金ですね。では、今お持ちの硬貨を預けたい分だけこちらにお渡しください」

龍斗は麻袋の中からお金の入った巾着袋4つを取り出し、自分の腰につけていたものも外してカウンターの上に置く。と、ここで龍斗は説明の一端を思い出す。

「確か現金も幾らかは持ってた方がいいんですよ」

「はい」

即答だった。それを踏まえた龍斗は巾着の中身を幾らか整理した。それを終えた上で改めてお金を預けた。巾着袋を次々とだす龍斗に驚いていた受付係だったが、声を掛けられるとすぐに元の表情に戻った。流石のプロ根性というべきか。

「では預金金額をお知らせいたしますので、少々お待ちください」
しばらくして、眼鏡の受付係が戻ってきた。その表情はさっき会った時と違い、強張っているように見える。少々震える声で彼女が言った。

「ええと、リュウト様の預金金額ですが、10ドルク銅貨7546枚、1000ドルク銀貨639枚、10万ドルク金貨87枚、合計で……941万4460ドルク、です」

第7話：銀行帰りの会話

「……にしても1000万近い財産って凄いね」

「いいなーお金持ちー。ねえねえ、100万くらい頂戴よ」

「誰がやるかよ、自力で稼げ」

銀行を出た龍斗達3人は街の中を散歩していた。百聞は一見に如かず。実際に目で見ながら説明を聞いた方が覚えやすいし、地理的なことも把握できる。更に龍斗は霞、連と会話をする中で大陸の言葉を感じるようにしていた。元々他人よりも記憶力が良いので、一度さらっと説明されただけでも大分覚えることが出来た。会話が続くうちに話すことが無くなり、今は銀行でのこと、お金のことについてが話題となっていた。

龍斗に金を無心して断られた霞は頬を膨らませていたが、ふとあることに気付いた。

「そういえばさ、東君はなんであんなにお金持ってきてたの？」

「ああ。うちは俺以外全員死んだからな。大半は葬式の時にもらった香典だ。最初は泥棒に盗られるよりかマシだと思っただけだったんだが、舟を出した後に気付いてな。香典返しにお土産買って帰るつもりだった」

再び家族の死に抵触してしまった霞はしゅんとなり、ごめんと呟いた。連はそれを聞いて湧いた疑問をぶつけることにした。確かに軽んじて良い話ではないが、当の本人が乗り越えようとしているのだ。その気持ちを尊重してのことである。

「でも香典にしてもちよつと多すぎじゃないか？」

「一つは罪悪感だろう。2人とも知ってるだろ、うちが一度村八分にされたの。解消されたけどやっぱり申し訳ないって気持ちから多めにしたんじゃないかね。もう一つはよく知らないけど爺さんかお偉いさんに重用されてたことだろう」

「なるほどねえ」

「ところで俺も疑問に思うことがあるんだが」

お金の話題が続いたことで、すっかり忘れていた疑問を思い出した龍斗。

「ドルクが金の単位なのは分かる。でも銅貨が10、銀貨が1000、金貨が10万っていう値段設定は何だ？ 今ひとつわからないんだが」

「それはね、大和と違って硬貨自体にお金としての価値が無いからだよ」

霞が答えてくれたのだが、あまりにあっさりしすぎで今一つわからない。同じことを思った連が補足説明する。

「つまり大陸ではあれはただの金属の塊と見て値段を決めているのさ。だから1グラム当たり何ドルクっていう決め方。ただ、元々お金として使うために作られているから一枚一枚価値が違うという意味がない。つまり硬貨はどれも同じ量の金属で作られていることになる。同じ量ということはどれも重さが同じだから、結局貨幣は値段が安定しちゃうんだよね。……で、安定しているからまだ取引にも使えるわけだ」

「ただの金属として、か。もう一つ……これは銀行への信頼に触れちまうけど……あれ大丈夫なのか？ 例えばここが他所の国に襲われたりしたらやばい、というか今だって狙ってるとこありそうだな。何せ大陸中の金が集まってるわけだし」

「ははっ、流石は忍、いいとこに気が付くね。それについては本当に大丈夫なんだ。端的に言えば大陸にある全ての国は銀行の融資を受けている、つまりは銀行に借金がある。おまけに国を動かすためのお金のほとんどが銀行にあるから何処も銀行に頭が上がらない。もしオリジアに危害を加えようとする国があつたら即座に経済制裁が加えられる。お金を一切動かせなくなるから国が機能しなくなるね」

「国が自力で大金を動かすのは大変そうだな……国にとっても利益が無いのか」

「あ、それと銀行の運営とオリジアの統治は商人ギルドがやってるの。ギルドは何処の国にも属さない独立した組織。それにオリジアは念のために全ての国と不可侵条約を結んでる、だから兵力が無くても国がやっっていけるんだよね」

この日龍斗は度量衡の単位、店の看板、お金についてのあれこれを学んだ。それに加え、龍斗は新しく服を調達した。龍斗が着ているのは未だ大和から持ってきた着物に袴。大和では当たり前な格好なのだが、大陸には無い服装のため街を歩けば嫌でも目立ってしまった。人の注目を集めることを嫌う龍斗としては一番に避けたいことだった。まだ少し抵抗があるが、連や霞曰く「そのうち慣れる」とのことだった。

太陽が地平線に沈む頃、2人と別れた龍斗はデイビス夫妻の家に戻った。扉を引くと昼間かと思うほどに明るい光と喧騒が龍斗を迎え入れる。デイビス夫妻の家は旅亭を経営していた。昼間は開店休業みたいなものだが、夜になれば食堂は酒場となり、連日酒飲みがわいわいがやがや騒ぎ立てる。そうして酔いつぶれた客に追加料金で寝床を提供したのが旅亭の始まりらしい。やがては最初から宿泊を目的とする客も現れ、今のスタイルが定着していったのだとトマスは語った。龍斗はそうして客に提供する部屋の一つを化してもらっていた。

食事は基本的に食堂で行う。龍斗は騒ぎの中心を外れるように、端の方のテーブルに座った。

第8話：地図と決意

龍斗がランドレイク大陸に漂流してから1ヶ月が過ぎた。この間龍斗は特に何をするということもなく時間を過ごしていた。否、実際には何をすればいいのか分からなかったと言った方が正しい。霞も連もこのオリアで仕事を見つけ働いていた。だが龍斗はそれらの職に就きたいとは思わなかった。かといってこのままデイベス夫妻の所で厄介になっていくわけにはいかない。なら旅亭で働くか。その選択も龍斗には出来なかった。

何せ最近まで龍斗は忍になることを目標としていた。忍とは影なる者。諜報や暗殺、破壊工作、情報操作を生業とするが故に、その存在は表沙汰には出来ない。龍斗は15歳、既にそういった任務を任せられ、遂行していた。その中には当然の如く暗殺　人を殺めるものも含まれている。

連は龍斗と一緒に基礎体力の鍛錬をした時期がある。だが連は忍になるためにしていたわけではなく、実家の空手道場を継ぐためだった。無論殺人の経験など皆無である。

一方霞は女忍者　俗に言うクノーになることを目標としていた。龍斗、連と同じ年で龍斗と同じ忍の道を進んでいたが、決定的に違うのは3年前に行方不明となったこと。この時点で彼女は11歳。忍の任務が与えられるのは12歳からなので、彼女はまだ忍として動いたことが一度もない。即ち、人を殺めた経験がない。

（そう、俺の手は既に何度も血潮に濡れている。そんな俺が一般人としてのこのうと暮らしていけないはずがない。今更……道は引き返せない）

龍斗は2人が羨ましかった。血の穢れを知らず、自分の道を進んで行けたのだから。

そんなある日、龍斗は街の商店で大陸の地図を見つけた。そのま
ま何の気なしに購入し、旅亭に戻った。衝動買いと言っても過言で
はないかもしれない。食事の後落ち着いた時に改めて見ると、何故
これを買ったのだらうと自分で不思議に思ったほどである。値段は
1枚3万ドルク。旅亭の宿泊料が一泊2食付で2000ドルク、林
檣1個が100ドルクということなので、かなり高価な買い物であ
る。にもかかわらず使いようがない。なんとという無駄遣いだらうか
だがこの地図を手にした時から、龍斗の心境に変化が起きたのも
また確かだった。部屋にいるときは地図を見て時間を潰すようにな
っていた。地図の何を見るのか、そして何を思うのかは大体いつも
同じだった。

龍斗の視線はまず地図の右端、つまりは東端に向かう。そこにあ
るのは様々な形の島が南北に長く連なっている様子。その横にはタ
ツノ列島という文字が書いてあるが、タツノ列島よりも『大和』の
方が龍斗にとっては馴染みがあった。

（大きめの島が上から順に玲角島、徳間島、御蔵島。更に数個の島
を合わせて大和か。……けっこう広いと思ってたが、小さいな。で、
これに乗って西へと）

龍斗の視線はタツノ列島から左側へと進んでいった。海には大き
な渦が描かれているが、あまりの大きさに紙から切れてしまってい
る。渦の中心に書いてある『トリトン海流』から更に左、『ランド
レイク大陸』で目を止めた龍斗は母から聞いた言葉を思い出す。

「私が生まれ育ったのはとても大きな陸地だった。世界はここだけ
じゃない」

それはぼつりと呟く独り言のようなものだったが、龍斗の耳に強
く残っていた。そしてそれは、大陸に流れ着いた今、龍斗が思うこ
とでもあった。

（井の中の蛙大海を知らず、か）

龍斗は自分が今いる所、『オリジア』と書かれた場所に目を向け
た。街の様子は非常に賑やかで、かつて龍斗が住んでいた玲角島よ

りも広い面積を持つが、それでも大陸のごく一部でしかない。つまりまだ龍斗は大陸の中のごく一部しか知らないのだ。

(どうせなら、もっと大陸を知りたい。知識は多い方がいい。無くて困ることはあってもあつて困ることはない)

最終的に龍斗はそう考えるようになった。

そして龍斗はついに決意した。自分の進む道を定めた。多少迷いはあるものの、自分が思う条件を満たしている職業は他になかった。(冒険者、か。正直気乗りはしないが……今まで培ってきた戦う力を失うのは俺には出来ない。どうせなら縛られずに生きていきたいなら、この道しかないか)

この大陸には職業ギルドというものがあり、何か職に就きたい場合はそれに所属するのが一般的である。だが、大抵のギルドは加入に際して厳しい条件が課される。

例えば銀行の経営も行う商人ギルドでは、お金の計算はもちろん社会経済についての知識も必要となる。それらを問うための筆記試験に合格しなければギルドに入ることは認められない。

例えば鍛冶屋ギルドでは、親方と呼ばれる中堅の職人の下で何年も下働きを経験した後、実技試験を受け合格しなければならぬ。

それに比べ冒険者ギルドには加入条件が一切無かった。その理由は至極簡単、冒険者の世界は完全な実力主義だからである。力が無ければ生き残れない。常に死と隣り合わせと言つていい世界。だが逆に言えば、力量さえあれば任務を次々こなして荒稼ぎすることが出来る。それ故に冒険者という職業は大陸で最も人気のある職業だった。

更にギルドは、全ての国から独立した組織である。商人ギルドはオリジアという拠点を持つ例外的なものだが、承認が得られれば何処の国で商売をしても構わない。鍛冶屋もまた然り。冒険者では、関所を通る時の通行料が半額になる。それも決め手の一つとなった。

思い立ったが吉日と、龍斗はすぐに冒険者ギルドに行き登録を済ませた。ややこしい手続きが必要なのではと内心不安だったが、カードを水晶にかざすだけで登録は完了した。

だが龍斗にはもう一つ決意したことがある。

第8話：地図と決意（後書き）

ちよつと焦ったかな……

ハアorz

素人の拙い作品ですが感想など頂けると有難いです。

第9話：雁は発つ

『忍びても 景色晴れぬと 雁は発つ 跡は濁れど 情けは無用』

そう書かれた紙を囲うように座る4人の人間がいた。皆がその紙に書かれた文句を見つめ、眉にしわを寄せていた。そのうちの1人、ベラスが金髪を振り乱した。

「全然分らないわ。何なの、これ」

その隣にいた茶髪の男性、トマスもベラスに倣って首を振った。肩をすくめ、両手を上に向けるおまけ付きである。

「僕もお手上げだ。こんなのは見たことない。……君らはどうだい？」

彼の視線は黒髪の少年少女、連と霞に向けられた。同じ大和出身の彼らなら、何か分かるかもしれないと思ったからだ。その声に反応した連が顔を上げた。

「あ、そうか。お2人は知らなくて当然ですね」

そう前置きしてから説明を始める連。

「これは俳句、じゃないな、短歌っていうものです。美しい景色を見た感動とか、自分の気持ちを誰かに伝えたいときとかに詠む……まあ、詩ポエムみたいなものですよ。ただ、単なる詩と違っていろいろ制限があるんですけど」

「制限？」

聞き返してきたベラスに、連は答えた。

「ええ。俳句だと五七五の計十七音、短歌はそれに七七を加えた計三十一音で全てを表現するんですよ」

「へえ、東洋の神秘だね。それで、意味は？」

「んとね、『いくら我慢して待ってても、空の景色は晴れにならず曇っている。だから渡り鳥は飛び立っていく』前半部分はこんな

感じかな」

霞の回答にますます訳が分からないと2人が首を傾げる。

「えっと、……だから、何なんだろう？」

その様子を見た連が苦笑を浮かべながら説明する。

「それは文字そのままの表の意味です。龍斗がわざわざ置いてったんだから、必ず別の意味があるはずですよ」

「別の意味？」

「そうそう。東君、長く家を空ける時たまにこういうの残して行っただんだよね。で、毎度何か伝言を隠してたから、これもそうだろうなって」

そうして霞と連による解説が始まった。デイビス夫妻は旅亭の仕事があるのでここで退席した。

「忍ぶはもしかしたら『偲ぶ』がかかってるんじゃない？」

「景色は……『気色』？」

「後は何かあるかな……」

30分後、仕事が一段落した夫妻は連と霞の所へ向かった。だが扉を開けた瞬間、中の空気が重くなっていることに気付いた。連は肘について頭を抱え、霞は椅子に全体重をかけて天井を仰いでいる。その様子にただならぬものを感じたベラスが声をかける。

「ちよつと、2人ともどうしたの、何か分かったの!？」

ベラスに視線を向けた連は、顔を起こした。

「ん、ああ、ベラスさん。ええ、大体分かりましたよ、奴の言いたいことは」

「それで、何だつて？」

トマスの質問に脱力した声で霞が答えた。

「『いくら故郷を懐かしんでも、気持ちを押さえようとしても、自分の気は晴れない。だから俺は渡り鳥の如くここを離れていく。ちよつと面倒事残して行っちゃうけど、心配するな。』……全体的に

まとめるとそうなるね」

部屋の重い空気がデイビス夫妻を飲み込んだ。驚いた表情のまま固まっている。やはり結構ショックを受けた様子だ。ある程度こうなることを予想していた連はフォローに入った。

「まあでも、お2人にはちゃんと感謝してますよ。ほら」

テーブルの上に置いてある3枚の金貨を指さす連。

「1泊2食で2000ドルク、1ヶ月30日で6万ドルク。30万ドルクは明らかにおかしい。命を助けてくれた。食住を提供してくれた。それに対するせめてものお礼のつもりでしょう」

「そんな大金……とても受け取れない……」

「駄目ですよ、ここは受け取るべきですよ」

「そうですね。それが龍斗に対する礼儀ってもんです」

連も霞もベラスに反論した。そこからは受け取れ、受け取らないの堂々巡り。このままではらちが明かないとトマスがある提案をした。

「えっと、なら4人で山分けにするのはどうだい？ 龍斗君は色々教えてくれた君たちになんて感謝しているはずだろ。なら、君たちにも受け取る権利はある」

全額はもらえないので、連や霞にも分配することで額を減らそうという考えである。だが連も霞も目を丸くして首を振った。

『受け取れないですよそんなの!!』

こうして立場が入れ替わり、再び堂々巡りとなってしまった。いつの間にか日は傾き、窓から入る光がテーブル上の金貨を照らしていた。

最終的にこのお金は、デイビス夫妻が10万ドルク、連と霞はそれぞれ5万ドルクを受け取るということで決着がついた。残った10万ドルクは教会に寄付することとなった。

第10話：無常の闇を斬り裂かん（前書き）

総合評価10ポイント

お気に入り登録件数5件

いやはや、有難うございます。本当に嬉しい限りです。

第10話：無常の闇を斬り裂かん

鬱蒼うつそうと生い茂る緑の中、草一本生えていない一筋の地面が蛇行していた。その道の真ん中に1人の少年が立っていた。鋭い眼光で周囲に目を走らせた少年　龍斗は麻袋をたすき掛けにし、腰を落として構えを取った。左腰には祖父の形見である脇差が、紐を通して括り付けてある。左手で鞘を固定し、右手で柄つかを逆手になるように軽く握る。そのまま目を閉じ、周囲の気配を探りながら呟く。

「森羅万象、無為自然……『即応の霧』」

忍の世界にはその道を歩む者にしか伝授されない秘伝の技というものがある。それらを総称して「忍術」という。今龍斗が呟いたのはその忍術の一つ『即応の霧』。霧のように意識を広げ、より広範囲の気配を察知するという技である。

しかし木陰や落ち葉の中に隠れる『葉隠の術』、話術によって相手を翻弄する『五車の術』あたりなら実際に使うことが出来るのだが、口から火を噴くなど攻撃としての『火遁』、蝦蟇がまを呼び出す『幻術』、分身を作り出す『分身の術』など、忍術と呼ばれるもの的大半はおよそ人間業とは思えない物ばかり。『即応の霧』も現実的にはあり得ない術の1つと認識されている。しかし気配の察知には精神の統一が必要となる。故に今では短時間で精神統一するためのまじないという認識で『即応の霧』発動の呪文が唱えられる。龍斗が唱えたのも本気で効果発動を信じているからでなく、精神統一の認識からであった。

迫る気配を探り当てた龍斗は左足に体重をかけ、右足を滑らせて構えを直す。

「無常の闇を切り裂かん……『暁』」

脇差の銘を語り、左手の指で鯉口を切る。その刃が露わになった瞬間、森の陰から唸り声と共に一匹の犬が現れた。大きな犬歯をむき出しにし、尻尾を立てて龍斗を威嚇するその姿は、遠目に見てもかなりの大型であることが分かる。その膂力も並大抵ではない。一瞬身を屈めたかと思うと、次の瞬間には龍斗の喉を噛み千切らんと彼の身長よりも高く跳躍する。

（やはり狙いは喉笛か、甘いな）

龍斗が野犬と戦うのはこれが初めてではない。玲角島にいた時、忍の修行の一環として山籠もりをしたことがある。それは大陸の言葉で言えばサバイバルと呼ばれるもので、人里離れた山の中たった1人で1ヶ月間、自給自足で生き延びねばならない過酷なものだった。その修行によって野生動物との戦い方や自然の中で生きる術、薬草の知識などを学ぶのである。

野犬は短期決着を好む。跳躍して上から攻撃すれば相手の視線もそれを追うために顔が動く。顔が上を向けばどうなるか。狙いである急所の喉笛が無防備に晒されるのだ。

だがこの戦法には1つ弱点があった。

龍斗は体重を右足に移動させ、右腕を斜め上へと振り上げた。逆手に握られた脇差の刃が、戦法の弱点 無防備となった野犬の腹に突き刺さる。勢いそのままに腕を振り切ると、野犬は自重によって刃から抜け落ち、地面に叩きつけられた。腹から赤い血を溢れさせ、血だまりを広げながらもなお立ち上がるうとする野犬の首筋に脇差を当て、龍斗はその喉笛を引き裂いた。

（さて、あと何匹だ）

動かぬ死体となった野犬から目を離し、辺りを見回す龍斗。その顔には、その目には人間らしい情など欠片もない。命を奪うことに慣れ、殺すことに何の躊躇ためらいもない殺戮者さつりくしゃの目である。だがそれは同時に、相手にやられて自分が命を失う覚悟がある、ということも意味している。

『忍たるもの、生死あらば情を断つべし』

やはり龍斗には忍の教えが染みついているのだ。そして忍である以上、一切の油断は禁物。野犬が単独で動いているというのは樂觀すぎる思考である。少なくとも五〜六匹、多い時には数十匹という単位の群れを形成しているはずなのだ。

複数の気配が迫るのを感じ取った龍斗は腰を落として構え直し、脇差『暁』を握る手に力を入れた。

「ふう、終わったか」

血だまりに沈む10匹の野犬を見ながら龍斗が言った。気配を探ってもこちらに向かつてくるものはない。着物と違い、大陸の服は肌に密着する作りであるために体がどれだけ動かせるか不安だったが、実際戦闘をしても問題はなかった。龍斗は足を曲げ、野犬の顔に近付いた。

（これが、ハウンドドッグか……確か上顎の牙2本を取るんだっただか）

龍斗はオリジアを出るにあたって1つの任務^{クエスト}を受けていた。その内容は、ハウンドドッグ及びワイルドボアの討伐。次の街に行くために必ず通らなければならぬこのアサンの森でのクエストだったので、ついでに受けていたものである。

討伐系のクエストを受けた際は、対象を仕留めたという物的証拠が必要となる。何を何体倒したか、その証明のために対象の体の一部を持ち帰るのだ。ただ持ち帰ればいいというものではない。ギルドが指定した特定部位を持ち帰ることで初めて討伐完了となる。今回討伐対象となっている2種の特定部位は牙。なので龍斗はその部位を回収する作業に入った。他の歯より幾分大きい犬歯の上に脇差の刃を突き刺し、歯茎から抉り取った。

残り9体のハウンドドッグからも牙を回収すると、龍斗は死体の前足を両手で掴み、森の中へと投げ捨てた。野生の肉食動物は死肉

を食らうものが多い。人が通る道路のど真ん中に放っておけば、その肉を食らうために本来道路まで出てこないはずの野生動物が道路に出てきてしまう。そうなれば通行の邪魔どころの話ではない。なのでギルドの規則として道路上に死体を残さないことが定められている。道路上にさえ残さなければ後はどう処分しても構わないとのことだったので、龍斗は文字通り、好きなように放り投げたのだ。

死体を処理した後、龍斗は地面に耳をつけた。こうすることで近くに川があるかどうかを探ることが出来る。幸いにもすぐ近くにありそうだったので、龍斗は森の中へと入っていった。途中で自分が放り投げたハウンドドッグの死体を1つ見つけた。龍斗は再び横に放り投げ、更に進んで川に出た。

着いてみると川というよりは小さな清流であった。しかし龍斗にとってはそれで十分だった。回収したハウンドドッグの牙を1本1本水にさらし、脇差を使って歯茎の肉をそぎ落としていく。血や肉は時間の経過と共に腐敗が進み異臭を放つ。大抵の冒険者は気にせずそのままにする。ギルドとしても部位の回収さえできればそれでいいので、特に気にすることは無いというのだが、龍斗は道中で悪臭が移るのを嫌った。

20本の牙を全て洗浄し、オリジアで買った2つ目の麻袋に詰め込んだ。

（さて、そろそろ戻って進みますかねえ）

そう思って歩き出したその時、遠くで派手な破壊音が響いた。

第10話：無常の闇を斬り裂かん（後書き）

今更ですが……このタイトルのつけ方どうなんだろう
いいのかなこれで…？

忍術についてですが『即応の霧』は自分で考えだしたオリジナルの
技です。実際にはそんな技はないです。

第11話：無常の闇を斬り裂かん 2

（何なんだ、さっきの派手な音は）

龍斗は木々を飛び移りながら走っていた。地上を走るのとは様々な野生動物に遭遇する可能性があるために危険である。この辺りに生息する動物は木の上に登ることはないの、これが最も安全な移動経路ということになる。

（そついやさっきの俺みたいに路上でも襲われることがあるんだよな。ということは、馬車か何かがある森の中に突き飛ばされた可能性が高いな）

「其の速きこと風の如し……つっても変わらねえか。もうちょい足速くならんものかね」

1人悪態をつく龍斗だが、その声に応えるものは誰もいない。焦る気持ちを押さえながら龍斗は森を突っ切っていった。

「あー、やつぱりな……」

音の発生源を見つけた龍斗は、木の上からその様子を眺めていた。案の定、そこには道路から突き飛ばされた馬車が1台転がっていた。恐らく馬車をそのようにした張本人、ワイルドボア数体を取り囲み、自慢の長い牙を以て馬車を大きく揺すっていた。馬車を引いていた馬は既に息絶え、巨体の猪いのししがその肉を食らい始めていた。

暫く観察していた龍斗はあることに気付いた。耳を澄ましてみると、馬車が揺れる度に人間のうめき声が聞こえた。中にまだ人がいる。

（さて、体長は1メートル程のが3体か。『暁』……じゃあ時間かかるな。ならここは……）

龍斗は左手を背中に回した。麻袋と同じように、左肩から右腰へとたすき掛けした太刀の鞘を掴む。

「父さん、頼むぜ。……早霧の山に茜差す、『東雲』^{しのめ}！！」
父の形見である太刀『東雲』の刀身を露わにすると木から飛び降り、着地と同時に横薙ぎの一撃を放った。それはすぐ傍にいたワイルドボアの前足を斬ったため、相手はバランスを保てず横倒しになる。隙だらけになったその首筋に刃を当てると、躊躇いなく刀を引いて血しぶきを上げさせる。と次の瞬間、気配を察知した龍斗は後ろに転がった。体制を直して見ると、赤く染まった猪に進路を阻まれた別の猪の姿があった。

（ちっ、俺としたことが……気配捉えるの忘れてたな。だから俺はまだまだなんだ）

かすった左腕の痛み顔に顔を歪めながら自身に悪態をつく龍斗。だが今はそれどころではない。瞬きで気持ち切り替え、太刀を両手で構え直す。

「森羅万象、無為自然、『即応の霧』」

そう呟き、今度は敵の気配を逃すまいと意識を全体に向ける。先程避けたワイルドボアがこちらに突進しようとした瞬間、龍斗は数歩分横跳びし、馬を食らう一体に向かって走り出す。こちらに気付いた猪は顔を振り、龍斗を弾こうとするが空振りに終わった。猪の背に跳び乗り、両耳の間に太刀を突き刺す。

だがその後のことを考えていなかった。猪が派手に暴れ出したため、太刀を抜くことも降りることも出来なくなった。両足で胴体をはさみ、太刀を握って振り落とされないようにしがみつくと。流石にこの状態から普通に飛び降りれば無事では済まない。形見の太刀を見捨てる気は毛頭ない。暴れる反動を利用しつつ何とか片足を背中に上げた龍斗。太刀を握る手の力を強め無理矢理空けた手で脇差を抜く。

ワイルドボアが飛び上がり、後ろ足2本で直立するような格好になった。好機とばかりに龍斗は後ろ足の1つから鮮血を上げさせる。全体重がかかっている足が脱力しバランスが崩れる。その瞬間に龍斗は太刀を手放し、跳び下りた。倒れてもなお足をばたつかせる猪

に背中側から近付き、体当たりを受けないようにしながら首や腹を滅多刺しにする。やがて動きが小さくなり、ぴくぴくと痙攣するだけとなった。頃合いと判断し、脇差を直した龍斗はワイルドボアから太刀を引き抜いた。血糊を振り払いながら気配を探る。

（もう1匹いたはずだが……まあいい）

太刀『東雲』を鞘に納め、龍斗は馬車を確認した。ワイルドボアの牙にやられ所々布が破れている。車輪は大破しているし木枠にもひびがある。馬車としては使い物にならないだろう。

（それでも中に侵入できるようなところはないな。ひとまずは無事か）

見当をつけた龍斗は馬の血に濡れた横向きの御者台から中に入った。

第11話：無常の闇を斬り裂かん 2（後書き）

今までに比べると文量少ないかな。いつもは2000字越えなんです。今回は1600ほどかな。別に意図しての事でないので特に気にしていませんが。

第12話：無常の闇を斬り裂かん 3

「誰かー、生きてるか？」

声を掛けながら龍斗は馬車の中に入った。中の様子を見た瞬間、龍斗は目を見張った。馬車の中には男3人、女2人、計5人の人間がいた。だがそこには生氣というものがまるで感じられない。薄汚れた白い服に身を包んだ一同はこうべを垂れて座り込んでいた。不安、絶望、諦念……龍斗に感じ取れたのはそんな負の感情だけだった。

その空気を作り出している要因の1人、最も御者台に近い位置にいた男が龍斗に気付き顔を上げた。

「……おや、どちら様ですか？ 見たところ、冒険者とお見受けしますが」

男は目を細めた。薄暗い馬車の中に長時間閉じ込められていたため、龍斗の後ろから射す光が眩しいのだ。龍斗は光を受けるその顔に目を向けた。黒髪、黒目と大和人のような特徴を持っているが、それにしても肌色が白すぎる。冒険者、という言葉に眉を顰めるも、龍斗は渋々肯定する。

「ん……まあ、その通りだが。そういうあんたは大和人、てわけでもなさそうだな」

「ええ、仰る通り私は大和人ではありません。貴方は……いや、止めておきましょう。今は悠長にしている場合ではありませんしね」
（何だこの落ち着き払った態度は？ 他の4人も、今の状況分かってるのか？）

男が言う通り、今は悠長にしている場合ではない。道路上ならまだしもここは森のど真ん中なのだから。しかし馬車の中にいる5人には慌てる素振りが無い。話しかけてきた男以外は俯いていただけだった。男の顔も無表情、何処か達観したようにも見える。

「では冒険者さん、我々に構わず早くお逃げなさい。いつまた獣が

襲ってくるか分かりません故」

「は？」

龍斗も同じ結論に達していた。それ故に男の発言が信じ難く即答で反応してしまった。訳の分からない龍斗は問いかける。

「何故だ？ 何故それが分かかってて見捨てると」

「我々が『奴隷』だからですよ」

遮った男の言葉は非常に衝撃的だった。龍斗は驚きを隠しきれず、同時に歯を食いしばった。無意識のうちに力が入り、握り拳が小刻みに震えている。

「……奴隷……人を人とも思わぬ極悪非道……！！」

奴隷とは言わずもがな、他人に所有される立場の人間のことである。島国大和では、国の成立と共に単なる商売目的の人身売買は禁止されている。例外として大飢饉などの災害時、他にどうしようもなくて娘を遊郭に、という2つの場合に限り人身売買が認められるが、それ以外で行った場合は厳しい拷問にかけられる。余談になるが、大和では殺人は重罪。正当防衛が認められない限り罪人は極刑即ち死刑。大和において命とは非常に重い物なのだ。

だが海を渡ったこちら側、ランドレイク大陸ではその常識は当てはまらない。こちらの世界では人身売買は当たり前のように行われている。殺人を犯した者が死刑になることもない。森の中で野獣に殺されたと嘘を言えばあっさり認められてしまうからだ。初めてそれを知らされた時、龍斗は今と同じように怒りを表したものだ。滅多に感情を表に出さない龍斗にしては珍しいことで、連や霞でさえ驚いたくらいだ。その時と同じように怒りを晒し、また同じようなことを思う龍斗。

（畜生が、人の命を何だと思って）

だがその思考は突然起こった地震によってかき消された。たたらを踏むも何とか倒れ込むのを防ぐ。

(いや、地震じゃない。馬車が揺れてるのか……!! まさか!!) 耳を澄まし、荒い息遣いを聞いた龍斗は確信した。

「また来たか野獣共。お前ら、本当に死ぬ気か？」

「死にたくはないが呪いのせいで全く動けねえんだよ。主の命令無しに動きまわれねえ。奴隷つてのはそういうもんだ」

金髪の男が両手を上げる。その手首には他の4人と同じ黒革の手枷が付けられていた。重さで垂れる鎖を見て龍斗は苦い顔をした。

「解放しなきゃ動けない、か……ここまで来て見捨てろってのか……？」

「まさか我々を助けるおつもりで？」

「当たり前だ。こつちじゃどうか知らんが人の命はそこらに捨てられるもんじゃねえ。全員助け出す」

ほう、と黒髪の男が声を上げた。そして龍斗に一つの提案をする。

「そこまで仰るのなら1つだけ手があります。我々と契約して頂きますか」

「契約？」

龍斗は男の黒目を見た。相変わらずの無表情だが目に光が戻っているように見える。

「ええ……皆さんも、ただ死を待つよりかはマシでしょう」

男の言葉に皆同意した。どうやらその契約というものをよって、少なくとも動くことが出来るようになるらしい。全員の意味を確認した龍斗は男に聞く。

「で、何をすればいい」

「本来なら法的手続きがあるのですが、形式上の事なので必要ないでしょう。簡単なことです。貴方の血をこの手枷につけて下さい。それで契約完了です」

「血、か」

龍斗は脇差『暁』を抜くと、左小指に切先を当てた。少し力を入れ、皮膚を破る。痛みに一瞬顔をしかめたが、血が滲み始めたのを見ると刃を鞘に納めた。

その血を男の手枷、手首に巻かれた革の部分につける。すると、手枷全体が淡く光を放ち、その光と共に鎖の部分が消えていった。それに目を見張りつつ他の4人の手枷にも血をつけていく。5人全員が鎖が解かれたところで、龍斗が呟く。

「さて、鎖を外したはいいが……」

馬車は相変わらず揺らされている。心なしかさつきよりも激しさを増しているように感じられる。

「2〜3体じゃ済まないよな……」

「よろしければ、我々をお使い下さい」

3人の中では最も背が低い黒髪の男がそう言った。龍斗が見ると、解放した男3人が直立不動で立っていた。龍斗は3人に尋ねた。

「戦闘経験は？」

「俺は元々冒険者やってたんだ。ワイルドボア如きには負けない腕がある」

と金髪の男。馬車の中で最も背が高く筋肉質でガタイがいい。

「折角助けてもらったんだ。恩を返したい」

と燃えるような赤い髪の男。

「フッフ、私達は元々戦奴隷……戦闘の道具として売られましたので、皆腕に覚えのある者ばかりですよ」

と黒髪黒目の男。龍斗は更に質問する。

「得物は？ 幾らなんでも素手は無理だろう」

「確かにそうだが、そんなこと言ってる場合じゃないだろう」

金髪の男がそう言うと、その前にいた黒髪の男が鼻で笑った。

「まあ貴方のように馬鹿力があるなら武器が無くても立派に戦えそうですね……」

「何だと……」

「ご安心ください。あの商人、我々と一緒に武器の類も載せていましたので。使い慣れた得物ではありませんが、これも無いよりはマシでしょう」

よく見ると馬車の奥に大きな箱があった。龍斗が開けて中を見る

と、細身の片手剣や斧などが入っていた。

「よし、それぞれ得物を持ったら一斉に出る。死に物狂いで戦うしかないぞ……死にたくなけりゃ、な」

その言葉を肯定し、それぞれ武器を手に取った。

第13話：無常の闇を斬り裂かん 4（前書き）

このタイトルいつまで続くんだろう。予想以上に展開が進まないのですよ。内容的に大丈夫かなと思ってこのままですが……

何はともあれ、第13話です。

第13話：無常の闇を斬り裂かん 4

「おい、あつたぞ。ここだ」

「ちよ、ちよつと待つてくださいよベリスさん」

レーザーアーマーを着た4人が息を切らし木に手をつきながらやってきた。その視線の先には緑色のバンダナを頭に巻いた無精ひげの男が手招きをしている。

「馬鹿が、静かにせんか！！ 気付かれたらまずいだろうが！！」

例のバンダナの男、ベリスは語気を荒げながらも小声で怒鳴るといふ非常に器用な真似をやつてのけた。視線を戻すと3人の男達がワイルドボアの群れと戦っているのが見える。

「あいつらに見つかつて命を落としてえか」

赤髪の男は剣で的確に急所を突いているし、黒髪の男は動きが速く目で追うのがやつとといったところ。金髪の大柄な男など、明らか両手武器と思われるサイズのバトルアックスを片手でぶんぶん振り回している。その様子を見た4人は青ざめた顔で首を横に振つた。「分かつてるじゃねえか。うちの盗賊団に命知らずの馬鹿は要らねえからな。さて、とつとと済ませるぞ。収穫なしじゃあデッツの兄貴に何されるか分からんからな」

ベリス一行はこのアサンの森を縄張りとして活動する盗賊団の一員、主に道路を通行する旅人や商人の馬車に襲撃し、奪つたものを売り払うことで荒稼ぎしている連中である。だが実際のところそのやり方には大きなリスクが伴う。他でもない冒険者の存在である。冒険者と一口に言ってもその仕事の幅は広い。野獣の討伐、遺跡探索、傭兵といったスタンダードな仕事の他に、配達や馬車の護衛といった仕事も請け負う何でも屋のような一面を持っているのだ。そして冒険者は強い。複数人で取り囲めば何とかなることが多いが、

1人1人の力量となると冒険者の方がまず格上であると思ってい。故に彼らは安直な浅慮で人を襲うことはない。機会があれば野獣に襲われた馬車からめぼしい物を奪うという手段を使う方がセオリーとなっているのだ。

横倒しになっっている馬車の裏手に隠れると、ベリスは腰からジャックナイフを取り出した。刃を幌に押し付け、一気に切り裂く。

「お、こいつぁ……」

ベリス一同は目を見張った。中にいたのは2人の少女。10代中盤と思われる金髪の2人は怪訝な表情を浮かべているがそれを抜きにしても端正で綺麗な顔をしていた。ねめつけるような視線で、ベリスはその全身をくまなくチェックしていく。

（服のせいで詳しくは分らんが、出るところは出ているな……おまけに顔がいい。それに手の黒革……奴隷がつけてる呪いのアイテム『拘束の手枷』か）

「こいつぁ上玉だ。おい、2人1組で担ぎ出せ」

「イエッサー!!」

言うが早いか4人の盗賊は馬車へと乗り込み、2人がかりで1人を肩に担ぎ、外へと運び出す。

「ククク、今夜は楽しめそうだなあおい」

飢えた獣のような目で下卑た笑いを浮かべたその時だった。

「何をしている」

突然のことに身を震わせ硬直した。が、ベリスは他の4人と違いすぐさま声の主へと顔を向けていた。そこにいたのは少女たちと同年代と思われる黒髪の少年。

（何だ、ガキか）

気を軽くしたベリスは4人に命令した。

「とっととデッツ兄貴のアジトへ持ってけ!! 直ぐ片付けて追いつくからよ」

「は、はいっ」

「待て!!!」

「おっと、行かせねえぞ」

ベリスは少年の行く手を遮った。右手のジャックナイフを目の前に突き付け、薄笑いを浮かべて少年に告げる。

「見たところ駆け出しの冒険者か何かか？ あいつらの事なら諦めな。俺らでしつかりその体を楽しんでやるからよ」

その言葉を聞いた途端、少年の顔から表情が消えた。対照的にベリスは下卑た笑みを強めていく。

「ははっ、何だその顔は。気でもあつたか？ まあ何でもいい。お前がここで死んだって、野獣にやられたことにしかならねえよ」

「1つだけ聞く。お前らは盗賊だな？」

「あ？ だったら何だ？ あれか？ 怖くなつたか。ええ、坊ちゃん？」

少年は腰に挿していた黒光りする棒に手を掛けた。右手が上がると、見慣れない形の刃を持つ短剣が現れた。ベリスに多少の緊張が走るが表情は笑みを浮かべたままだ。

（まあどうってことはない。所詮駆け出しのガキだ）

「何だよ、自棄になつたかお前」

「『俺が死んでも野獣にやられただけ』……そう言つてたな」

「ああそうだな、命知らずのお前にや似合いの死に様だ」

「その言葉、そっくりそのままお返しする」

ベリスの表情が一瞬で消えた。直後、その顔に青筋が立ち、歯ぎしりと共にナイフの切っ先がぶれ始める。

「ガキが……なめやがって!!!」

怒り心頭のベリスはナイフで斬りかかった。だがその刃が少年に当たることはなく、力任せに振つたため体制が前に崩れていく。その瞬間、ベリスの視野の片端で何かが動いた。同時に首筋から何か冷たいものが走ってゆく感覚が出てきた。攻撃が当たらなかつたことに驚きながら何かの方へと顔を動かす。だが思ったように体が動

かず、非常にゆっくりとしか首が回らない。まるで時間の流れが遅くなったような感覚である。ベリスは内心苛立っていた。

（くそ、何が起きた！？　何が動いた！？　速く動けよ俺の体だろ！！）

ようやく視界がその何かを捉えた。そこには先程まで自分の目の前にいた　はずの黒髪の少年。無意識のうちに目が合った。

（何だ、あの目は。デッツ兄貴と同じ、人を人とも見ないような……いや、そんなもんじゃねえ、もっと冷酷な、そう、殺すことに慣れきった、命を奪うことに何の躊躇いもないような……何だあの短剣、あんな赤い色してたか……いやまさか）

その刹那、ベリスの視界は真っ赤に染まり、もう2度と元に戻ることはなかった。

「ああ、最悪だ」

頸動脈から鮮血を上げるベリスを見下しながら少年　龍斗が腕を振った。血糊を落とし、脇差『暁』を鞘に納めたちょうどその時、男3人が龍斗の元へ集まった。血の池に沈んだ男を見てぎよっとする2人。

「如何なされましたか」

唯一平静を保っている黒髪の男が龍斗に問う。龍斗は頭を掻きながら苦い表情で答えた。

「盗賊だ。あと4人、2人1組で馬車の中にいた女2人を連れ去っちまった」

流石の黒髪もこれには驚いた。金髪がすかさず発言した。

「なっ……けどよ、おかしくねえか？　拘束の手枷はあんたとの契約で外されたる。声の1つでも上げればいいんじゃない」

「……しまった、私としたことが……」

台詞の途中で黒髪の男が声を上げた。その顔は龍斗と同じ、苦虫をかみつぶしたような表情。

「何か知ってるのか」

「ええ、すっかり失念してしまいました……女性奴隷の自由を奪っているのは拘束の手枷だけではありません。『束縛の呪い』もあるのですよ」

「呪いだと？」

「はい、奴隷の自由を奪う道具、呪いは1つだけではありません」

「何故2重に」

「簡単なことですよ。……女性奴隷は性奴隷としての需要もありませんから」

第13話：無常の闇を斬り裂かん 4（後書き）

主人公側からの描写が難しかったので相手側にしてみたらすんなり
かけたという

第14話：無常の闇を斬り裂かん 5

「性奴隷……ちっ」

龍斗は舌打ちした。赤髪の男が龍斗に問う。

「で、どうし、ますか、追いますか？ それとも……見捨てますか？」

言葉を詰まらせたのは敬語に直すため。内容自体は悪い話ではない。この場から無事に立ち去ることを考えるならそれが最善の策である。

「なっ、それは」

「それは無い。俺は追うぞ」

黒髪の男を遮って龍斗が断言した。その言葉に安堵した様子の男だったが、ふと思いついて龍斗に問う。

「理由を伺っても？」

龍斗は男3人を見渡しながら言った。

「俺は『全員助け出す』と言ったはずだ。『自ずから約しき盟を破ることなかれ』言った以上は実行する。それだけだ。文句がある奴は来なくてもいい」

龍斗の意気を感じてか2人が気圧されたように体をのけ反らせる。だがそれに屈しない者もいた。黒髪黒目の男である。

「フッフ、何と義理堅い。ま、我々は奴隷の身。主の命に従うだけです」

そう言っって何故か片手を頭にかざす。だが一瞬眉を顰めて直ぐに腕を下ろした。

「何でもいい。取り敢えず奴らの気配を探って見つけ出さないと。森羅万象、無為自然、『即応の霧』」

龍斗は4人が走り去っていった方角を向いて意識を集中させた。声をかけた時に感じていた気配を探ると、指先ほどの点を感じた。

「ちよっと遠いか？ でも動き回ってはいない……まっすぐ行けば

良いかもだが、急がないとやばいな。普通に走って間に合うかどうか」

「それはまずいですね……ふむ、私に1つ考えがあります。お任せ願えますか？」

「策があるのか？ なら任せろ」

龍斗からその言葉を聞いた黒髪の男は片手を頭に口を歪めた。

「では……風の精霊シルフよ、我らに力を、『フェアウィンド追い風』」

途端に龍斗は風を感じた。それは自然の風とは違う、質量を持つて纏わりつくような風である。そしてそれは驚くべき効果を龍斗にもたらす。

「凄いな、体が軽く感じる」

「お前、ただもんじゃねえとは思ってたが……」

「まさか魔法が使えるとは……」

他の2人も感嘆の声を上げた。だが黒い目はもう笑っていなかった。鋭い眼差しで3人を諷める。

「感心している場合ではありませんよ。それに効果は一時のもの。」

お急ぎになった方がよろしいかと」

「おっとそうだった。じゃあ行くぞ……其の速きこと風の如し、『疾走』」

龍斗はいつもの癖で忍術の文句を呟き、気配の方へと駆け出した。

「……今のは……」

「ああ……」

「フフフ、さて、急がなければ取り残されますよ」

あつけにとられていている2人を尻目に黒髪の男が龍斗を追う。

「あ、ま、待てよ……」

正気に戻った2人もその後が続いた。

「ハア、ハア……お、追いついた……」

「な、なんてスピード……」

「しっ、静かに」

たった一言で金髪、赤髪が一気に黙った。それには一瞥もくれず龍斗は前方にある洞窟を見続ける。山肌にポツンとあるその入口には2人の見張りが立っていた。それを見た金髪の大男が囁くような声で言う。

「あそこか……あの程度ならすぐ倒せるな」

「あれだけならな。どう考えても中に親玉がいるだろう」

その声を聞いた元冒険者という赤髪の男があ、と声を上げる。

「この辺で盗賊なら、デッツ辺りじゃない、ですかね、その親玉」

「どんな奴だ？」

「ぶつちやけ単純な奴ですよ。欲に忠実で深く考えることはない。

元々はそれなりに力のある冒険者だったとか。いつの間にか10何人程のチンピラを従えて盗賊になっちまいましたか」

「ならば、如何いたしましょうか」

龍斗は黒目に見据えられしほし沈黙した。

天然の鍾乳洞に少し手を加えただけの洞窟の中。その最奥へと1人の若者が歩いていった。濃い緑色のバンドナに茶色のシャツ、革製の胸当て　レザーアーマーというその格好は、見張りをしていた内の1人のものである。目的の場所には洞窟の端から端まで毛皮が敷かれている。壁際に並ぶのは、恐らく今までの盗賊稼業で得た物の中から選りすぐったのだろう、一目見ただけでも良質と分かる品々が並んでいた。

その中心に7人の人間がいた。2人は女性。顔を見る限り10代くらいで、両手には黒い革を巻いている。残り5人はすべて男性だった。床に転がされた女性を下卑た目でねめつけ、着衣の上から体を触りまくっている。その中心にいる大柄の男に若者は声をかけた。

「お頭！！　お楽しみの所失礼ですが、1つ報告が」

「ああ？　何だよ人が楽しんでる時に！！」

「おい、デッツさんを怒らせるなよ。命が惜しいだろ」

今まさにズボンのベルトを外そうとしていたデッツは若者を睨んだ。伸びた無精ひげに涎よたれをつけているが、その目は野獣のように荒々しい。しかし若者は威に屈さず言葉を返す。

「洞窟が冒険者に見つかりました。現在入口で交戦中です」

その言葉に全員の目が大きくなる。しかしそこは元冒険者という経験故か、立ち直りの早かったデッツがすぐに状況説明を求めた。

「それで、どうなってんだ」

「取り敢えずその辺にいた仲間達を応援に行かせました。1人は潰しましたが、あと3人と交戦中で予断を許さない状況かと」

デッツの顔に焦りが見えた。

（俺は盗賊になって日が長い。とつくに賞金首になってておかしくないな……）

「取り敢えず、相手は3人だな？」

「はい」

「なら12人で一斉に行け！！ 念のため俺も行く。最悪それまでの時間稼ぎだ！！」

「あ、それなら良いものがありますぜ」

若者が取り出したのは一本の黒光りする棒だった。それを見た女性2人の顔色が変わるが、誰1人氣付いた様子はない。

「潰した1人が持ってた武器です。かなり良いものみたいですよ」

そう言いながら若者は棒を両手に持ち、左手を動かした。現れた刃を見てデッツは驚愕した。

「こりやすげえ、なんて綺麗な刃だ……だがこいつぁお飾りのなまくら剣じゃねえのか？」

「いや、飾りじゃありませんよ？ 実際戦闘で使いますし、何より切れ味が抜群で」

デッツの目の色が変わった。武器として優れているという情報は彼にとって何よりも重要なことだからだ。デッツは若者が持つ短剣を受け取るうと腕を伸ばした。良いものが手に入るといふ先走った

気持ちから思わず顔がにやけてしまう。

「……ほう、どれだけすごいんだ、その切れ味は？」

「それは……こんだけだよ」

刹那、若者はその手首を斬りつけ、踏み込むと同時に手首を返して首筋を斬った。あまりに突然のことだったので、デッツが倒れた後も沈黙が続いた。血が広がり、若者が左胸に止めの一撃を刺す頃ようやくその沈黙が解けた。

「デ、デッツさん!!」

「嘘だろ……」

「まさか、ここじゃ最強なのに……」

「さてと」

動揺を隠せない他の面々を他所に若者はバンダナを投げ捨てた。

バンダナの影に隠れていた黒髪が露わになり、血糊を振り落とすと、藍色の鋭い目が残る男共を睨みつける。

「さて……こいつより腕のある奴はいないか。その命をかける覚悟
あらば、お相手致す」

第14話：無常の闇を斬り裂かん 5（後書き）

んー……まともな戦闘がない^^；

野獣と不意打ちかあ

まともな戦闘の場はちゃんと考えてあります。でも全然たどり着けない

ポイント入れて下さる方、お気に入りに入れて下さった方、本当に有難うございます。

至らない点などあるかと思いますが、頑張つて書いていきますのでよろしく願います。何かありましたら感想など頂けると嬉しいです。

第15話：無常の闇を斬り裂かん 6

デッツ率いる盗賊団はものの数分で全滅した。赤髪の男が言ったように、この盗賊団は元冒険者で力のあったデッツがチンピラをまとめて作ったものである。大した戦闘経験のないチンピラの中に、デッツと同じかそれ以上の力量を持つ者などいるはずがなかった。2、3人が敵討ちだと言って黒髪の少年、龍斗に挑むも、それは脇差『暁』により多くの血を吸わせるといふ結果に止まった。頭かしらと同じ血の池に沈む仲間を見て、恐れをなした盗賊たちは我先にと洞窟から逃げていった。

(外道に救い在らず。己が所業を悔いるがいい)

その心の声に呼応するかのように、全ての最後の一手が龍斗の前に現れる。

「命令通り、全て片付けました」

「いやあ、話に聞いてたが、見事にその通りになってら」

「いやはや全く、見事なご慧眼けいがん。感服いたしました」

3人の男が口々に龍斗を持ち上げる。自分で考えた作戦が上手くいって満更まんざらでもない龍斗だったが、思わずにやけそうになった顔に力を入れ、最小限の笑いに止める。

「別に大したもんじゃない。俺が見張りの1人に成りすまし、中に入って頭を潰す。動揺して洞窟から出ていく盗賊をあんたら3人が斬り捨てる……軽くつついて敵を誘き出す、単なる啄木鳥きじう戦法だ」

それはともかく、と龍斗は2人の女性に目を向ける。先程の経験からか2人の眼には不安と怯えの色が見えた。襲われる相手が変わるだけかもしれない。大方そんな見当外れな考えだろうと龍斗は男の黒目を見る。

「で？ こいつら開放するのはどうすりゃいいんだ？」

「ふむ……本来は束縛の呪いをかけた者からその所有権を譲り受けるものなのですが……」

一般的な、しかし現時点では不可能な前置きの後に続ける。

「む……やはり、『真血の契り』しかありませんかね……？　しかし、それをしてしまうと……」

今まで淀むことなく言葉を発してきたこの男が、初めて言葉を濁した。それ即ち、その方法をしてしまうと後が困るということなのだろう。だが彼の迷いを断ち切る声が出た。

「私達は……構いません。奴隷に堕ちたその時から、覚悟はしていました」

他ならぬ女性の声だった。今まで聞いたことのない彼女の声に男4人は驚きの表情を隠せない。……もつとも、黒目を見開いている男が驚いているのはそこではなかったのだが。

「……よろしいので？」

「構いません。攫さらわれた時点で全てを失う覚悟はしていました。もつとも、呪いのせいで舌を噛み切れることは敵いませんでしたが……今は失わずに済んだ、その幸運で十分です」

透き通るような金色の髪を持つ女性が毅然きぜんとした態度で龍斗を見据えた。その青い目に、少々幼さを滲ませながらも大人が持つような風格と威厳を感じて少しのけ反る龍斗。視線が揺れてもう1人の女性に焦点が合った。この女性も、彼女と同じ決意の目をしている。「こう申しておりますが……如何いかになさいますか？」

黒目を向けてきた男の声にもう迷いは無かった。後は龍斗の鶴の一声で全てが決まる。腕を組んだ後、龍斗は渋い顔で最後の確認をした。

「……本当にそれしか方法が無いんだな？　それをしなければ彼女らはここで飢え死にするしかない」

「はい」

「何が起こるか知らないが、後がある」

「はい」

「……あんたらも、本当にそれでいいのか？」

『はい』

黒髪の男に念を押し、女性2人に最後の確認をした。深く息を吸い、大きなため息をつく。

「ハア……仕方ない、その何とかってのをやるしかないか」

「では、今言った通りにして下さい。そちらの方は……分かってますね？」

龍斗と女性2人が頷く。それを黒目に映した男は結構、と一言残し男2人と共に壁際へと移動していった。特に意味はないのだが、言葉を他人に聞かれるのは倫理にもとる、とのことである。

龍斗は再び『暁』を抜き、左手の小指と薬指に刃を突き立てた。赤い液体が球を作っていくのを見届けると今度はその刃を女性2人に向けた。差し出された左手を裏返し、その小指の自分とほぼ同じ位置に傷をつける。赤い血が出てきたのを見て鞘にしまう。

龍斗は血が滲む2本以外の指を折り畳み、向かって左側にいた女性の小指に自分の小指を、もう1人の女性の小指には薬指をそれぞれ重ねる。指を離すと、女性達はそれぞれ自分の小指と重なった龍斗の指を口を含み、ついている血を舌で舐め取った。口から指が離れ2人の喉が動く。一瞬躊躇いを見せた龍斗だったが、彼女らに倣って1人ずつ同じように血を舐め取り、それを飲み込んだ。龍斗の動きを確認した女性2人は口を開いた。

『盟約神ミスラ、契約神ヴァルナの名において』

『レイア・フォルデント・マーティスが誓約す』

『ミーア・フォルデント・マーティスが誓約す』

『我が身、我が心、我が魂、我が全てを汝に捧ぐ』

2人が言葉を紡いだ後、3人の体が強い光に包まれた。薄く紫がかったその光が消えると同時に、2人につけられていた黒革製の腕輪と首輪が地面に落ちた。

「真血の契りの儀式はこれにて終了です」

男3人が近づいてきた。黒髪の男に目を向けようとした龍斗だったが、途中で動きが止まった。その様子に男が首を傾げる。

「如何なさいましたか？」

「あんたらはそれ、外さなくていいのか」

龍斗が指差したのは男の手首。男は両手を広げ、手の甲を見せながら上に上げる。手首にある黒革を見て合点がいった男は苦笑した。「確かに同じ方法でも外せますが、あまりお勧めできない方法ですし……そうですね、切り落とさない限りは」

「ならそのまま動くな」

突然龍斗が男の眼前に現れた。あまりに急なことだったので、幾筋かの光と風圧が通り過ぎる間、男の眼は皿のように丸くなったままだった。その間に金髪の男、赤髪の男も順番に同じ感覚を味わっていた。

数秒の後3人が正気に戻った。信じられないといった様子の顔で、握ったり開いたりを繰り返しながら両手を見る。彼らの手首にあるはずの黒革の腕輪は、既に大地の上に落ちていた。

「嘘じゃ……ないよな……！！」

「外れた！！腕輪が……！！」

「フ、フフフ……何たる僥倖ウレシイチキ」

三者三様に喜ぶ様子を見た龍斗は思わず口を歪めた。その右手にはいつの間にか抜かれた脇差を握っている。

「無常の闇を斬り裂かん……どうやら上手くいったようだな」

「しかし、よろしいので？」

未だ興奮冷めやらぬ様子で、しかし聞きなれた口調で黒髪の男が龍斗に問う。龍斗は脇差を鞘に納めながらそれに答えた。

「構わない、というか俺は奴隷制度と相容れるつもりはないからな。良かったなあんたら。これで晴れて自由の身だ」

その声は無意識のうちに低くなっていた。

ほとぼりが冷めた頃、金髪と赤髪の男は重ね重ね龍斗に感謝の言葉を述べながら洞窟を出ていった。今は黒髪の男を見送ろうとしているところである。元々彼らと一緒に出るつもりは毛頭なく、盗賊が溜め込んだ物品の中で剣が挿してある樽の辺りを物色していたのだ。何か気になる武器でもあるのかと思っていた龍斗だったが、すぐに見当違いだと分かった。彼が手に取って見ているのは細長い革製の袋。つまり剣を納める鞘を探しているのだと気付いたからである。彼が龍斗たちの方を向いた。丁度良いものがあつたのか左手には皮袋に入つた剣を持っている。

「この度は命をお救い頂き誠に有難うございました。重ねて奴隷身分からの解放。不肖この私、何とお礼を申し上げて良いものか皆目見当もつきません」

「おいおい、そんな大層な挨拶いらねえって。出会いは一期一会、だから誠意を尽くしたまでだ」

龍斗が苦笑しながらそう言った。黒髪の男はいつもの不敵な笑みを浮かべているだけである。

「フフフ、左様でございますか。では最後に1つだけ。彼女達の事、宜しく願ひいたしますよ」

「ああ、ちゃんと次の町まで護衛していくさ」

「……フフフ、ええ、願ひします。そうそう、洞窟から出て右に少し歩いたところに馬小屋がございました。馬車もありましたのでどうぞご利用下さい。では、私はこれで失礼させていただきます。」

「ご縁があればまた、お会いしましょう」

黒髪の男は右手を左胸に当て、恭しく一礼して去っていった。

（結局あいつが一番分らないんだよな。口調から態度から、常人とは違うんだが……まあいい、どうせ俺はこつちのことをほとんど知らないからな）

最後に聞いておいてもよかつたのだが、龍斗は些細なこととして流すことにした。

「さて、あとはあんたらか。ここからじゃ、オリジアよりも次の町に行く方が早いんだよな……折角馬車があるってんなら使わせてもらうかね。それで良いよな？」

振り返り、女性2人の顔を見る。

『承知致しました、ご主人様』

「……は？」

口を揃えて述べられた言葉に龍斗は違和感しか覚えなかった。

第15話：無常の闇を斬り裂かん 6（後書き）

気付けばお気に入り登録件数が増えている。評価ポイントも増えている。

読んで下さっている皆様、本当に有難う御座います。黒髪黒目の男ではありませんが、本当に「何とお礼を申し上げて良いやら皆目見当がつきません」ww

拙い作品ですがよろしく願います。

第16話：果たしてこの濃霧に茜を射せるのか

「さて……んー、じゃあ、あんたらにしか出来ない事を頼むとするか」

龍斗達3人は馬車で街道に出た後、丸2日かけてアサンの森を抜けた。今は森を抜けた先にある国、エルグレシア王国内にある旅亭の一室にいる。関門を通った時には既に空が赤く染まっていたため、今日これ以上動くのは無理だと判断したのだ。

龍斗の言葉を聞いた女性2人は身を固くした。男性が女性奴隷に命じることなど基本的には1つしかないからだ。だがその予想は見事に裏切られた。

「先に言っとくけど、夜伽の相手しろとか言わんから、そう身構えるな。取り敢えず俺はあんたらの情報が欲しいんだがな」

「私達の……？」

「ああ、今後どう動くかに関わることだしな。てか、いつまでそこに突っ立ってる気だ、椅子あるだろ」

旅亭の部屋はたいして広くはない。龍斗の傍にあるシングルベッド、反対側には壁に寄せられている木製の机、その下の空間にピツタリ納まるように作られた背もたれの無い木製の椅子が2つ。家具と呼べるものはそれだけである。というより、立ち歩くスペースを考えるとこれ以上は置こうにも置けない、といった感じである。

龍斗は椅子を引つ張り出し、座るように促した。それだけで歩けるスペースが半減する。

「え、あの、しかし、私たちは奴隷ですので」

「いいから座れ。そっちが良くても俺が話し辛い」

困惑する2人に軽い苛立ちを含め、命令口調でそう言った龍斗。それを聞いた2人は戦々恐々といった様子で椅子に腰かけた。奴隷にとって主の命令は絶対である。幾ら意に沿わぬことでも、命令されたことには従わねばならない。逆に命令が無ければ勝手に動くこ

とは許されない。故に一般常識で言えば奴隷というのはモノ扱いである。その常識を持つレイア、ミアにとって龍斗の行動は不可解だった。もつとも龍斗には何かおかしいことをしているという自覚は無い。奴隷の扱いという大陸の常識を知らず、ただ単に対等な人間として扱っているだけである。そもそも彼には彼女らの所有者であるという自覚がないのだが。

龍斗はベッドの上で胡坐あぐらをかいて座った。鶯色と青色の目を正面から見据える。

「まずあんたらの事を聞きたいんだが……どっちがどっちか忘れたけど、確か姓が一緒だったよな。つーことは姉妹か？」

「あ、はい。私はレイアと申します。歳は今年で15になります」

「わ、私はミアです。年は13です」

透き通るような金髪に鶯色の目をした姉のレイアからは、とても同年代とは思えない大人びた風格を感じ取った。一方、妹ミアの方は年相応といった感じで、全体的にまだ幼さが残っている。

（なるほどな、性奴隷用の呪いを掛けられただけのことはあるわ）
改めて彼女らを見ると、髪や目の色、雰囲気、胸の大きさ等細かいところでは差があるものの、どちらも共通して言えることがある。即ち綺麗、可愛い、美しいと形容される容姿の持ち主であることだ。
「で？ 2人は大陸出身か」

「えっと、それはこのランドレイク大陸出身という事でしょうか？」

「ああ、そうだな」

「でしたら違います。私達は別の 俗に北方大陸と呼ばれる大陸の出身です」

「え、ちよつと待て、大陸ってここ以外にもあるのか!？」

龍斗は思わず身を乗り出した。まさかランドレイクのような巨大な陸地が他にもあるとは夢にも思っていなかったのだ。今まで発言していたレイアは龍斗の様子に少し気後れしたが、何とか気を戻して質問に答えた。

「はい……東西南北そして中央にそれぞれ1つずつ大陸がある、と

教えられました。因みにこのランドレイク大陸はその内の1つ、東の大陸にあたります」

「そうか……いやあ、広いなこの世界は。人間が住むには広すぎるんじゃないかねえ」

龍斗は詠嘆の声を上げながら態勢を戻した。腕を組んで上を向いたまま首を横に振る。が、しばらくしてあることに気付き、視線を2人に戻した。

「待てよ？ 他所の大陸からここまでどうやって来た？」

2人の目を交互に見る藍色の眼は、最終的に口を開いたミーアの青目で止まった。

「大きなガレオン船に、帆船に乗ってきました。お父さん、お母さん、リノにアルトにダルジオ、アレン、ポルドール……護衛の兵士や従者と共に何ヶ月も掛けて……なのに、なのに……」

ミーアは途中から顔を下げ、両手で顔を覆いながら肩を震わせた。時折すすり泣く声が龍斗の耳にも届いてきた。レイアはそんな妹の肩を抱いてなだめている。ただならぬものを感じた龍斗はレイアに問う。

「……道中、何かあったのか」

「はい……ランドレイク大陸に向かう途中、私達が乗る船は海賊の襲撃を受けました。勿論、対策は十分にしておりました。善戦しましたがしかし、相手の力量が上回り……結果、ガレオン船は海賊に乗っ取られました。その時に……父を始め多くの方が殺されました。母や従者の一部は……奴らに犯された後に……っ、私たち姉妹と残りの従者、生け捕りにされた兵士たちは2、3の部屋に詰め込まれました。そして大陸に着くと同時に……生きている者は全員奴隷商人に売り渡されたのです」

ミーアよりも気丈なレイアも途中からは目を固く閉じ、声を震わせながら語った。語り終わると唇を噛み、涙を流すまいと^{まぶた}瞼を更に固く閉じる。だが思いとは裏腹に彼女の眼尻から一筋の滴^{しずく}が流れ、妹と同様に肩を震わせた。

……龍斗はそれをただ見守るしかなかった。

第16話：果たしてこの濃霧に茜を射せるのか（後書き）

このタイトル、正直言って書き手である私自身に対する問いではないでしょうかね。感情移入しすぎたのかな？

うーん、こういう会話だけの部分って結構難しいなあ……精進あるのみですね。はい。

第17話：翌日

翌日、3人は朝から馬車に乗って移動していた。街の通りは馬車のための道というわけではないのであまりスピードを出す事は出来ない。龍斗たちも他の馬車と同じようなスピード、人が歩くより少し早い程度でゆっくりと進んでいた。もっとも、龍斗達は周りに合わせて速度を落としているわけではない。馬車があまりに重すぎてそれ以上速度が上がらないだけなのだ。本来オリジアから出てエルグロシア王国に着くまで馬車で2日かかるというアサンの森。その途中から出発したにもかかわらず王国に着くのに2日かかった原因もここにある。

何故そんな荷馬車が重くなっているのか。それはレイア、ミア曰く重量オーバーだからである。ではなぜ重量オーバーなのか。それは盗賊団が抱えていた物品を龍斗が全て積み込んだからである。武器や鎧を始め、デッツの盗賊団は様々なものを溜めこんでいた。その中には宝石類など明らかに高額と思われるものも混ざっていた。このまま寝かせておくのももったいないということで龍斗が無理やり積み込んだのである。因みにこの時、レイア、ミアの2人は龍斗から適当なレザーアーマーをつけるようにと言われた。薄汚れた真っ白な服だけではあまりにみすばらしくて目立ってしまう。かといって盗賊団の隠れ家に女性用の服など置いてあるはずもない。仕方が無いので龍斗はそれをつけさせ、見た目だけ冒険者として誤魔化そうと考えたのだ。因みにその後龍斗は一度も外せと命令していない。故に今の今まで、夜寝る時ですら彼女達はレザーアーマーを着けたままであった。

一行の馬車は銀行の横にある小屋のような場所に止まった。龍斗は馬車から降りると、近寄ってきた男に声をかけた。

「買い取りつてここでいいんだよね？」

「はい、左様でございます」

「なら馬車の中身全部売りたいんだけど」

揉み手をしながら笑顔でやってきた男は失礼します、と断って馬車の荷台にかかる幕を開けた。

ランドレイク大陸の銀行は商人ギルドが経営している。そして大陸全土の金の動きを掌握しているわけだが、それだけではない。当然ながら商人は元々物を売買してお金を儲ける人間で、物の動きも掌握していると言える。そんな商人達が作った銀行だ、ただ金を動かすだけではなく普通の商人のように物の売買を行う場所も付属しているのだ。

これは普通の商人としての側面なので銀行でしか物を売れないなどということはない。寧ろ個人商店むじに行つて売った方が物によっては銀行よりも高く買い取つてくれることもある。……逆に悪徳商人に安く買いたたかれる心配もあるが。龍斗の場合は良い意味で言えば効率を重視した。悪く言えば店回りが面倒だからである。

承認は暫く顔を動かして中身を確認した後、再び龍斗に向き直つた。

「申し訳ありませんが、少々お時間を頂きませんか」

「ああ、別に急ぎつてわけでもないし、銀行にも用があるからな」

「では鑑定が終了次第お呼びいたします。失礼ですが、カードをご提示願えますか」

龍斗は呪文を唱え、カードを出して相手に渡した。隅々まで目を通した男は両手でそれを返してきた。

「冒険者ギルド所属、東龍斗様ですね。では、また後ほどご連絡させていただきますので」

そう言つて商売人がよく見せる所謂いわゆる営業スマイルをたたえた男に背を向け、龍斗はレイア、ミアアを呼んだ。

「レイア、ミアア、銀行行くぞ」

『承知しました』

馬車から降りた2人は既に歩き出して龍斗の一步後ろまで移動し、歩調を合わせて歩いていった。と、突然龍斗は立ち止まった。ほぼ同じタイミングで後ろの2人も歩みを止める。何だろうと不思議に思っていると龍斗が振り向いて男に問いかけた。

「そついや、その馬車自体も売れるのか？」

「ええ、まあ買い取りは可能ですが」

「んじゃ馬車も買い取ってくれ」

「分かりました。では、いつてらっしゃいませ」

その言葉を背に3人は銀行へと入っていった。

「東龍斗様、いらっしゃいますか？」

銀行内に女性の声が響いた。長椅子に腰かけていた何人かが反応したが、チラツと一瞥しただけで視線を戻す。銀行ではよくある光景である。呼ばれた者とそれに従う者が銀行員の前まで移動した。

「ああ、はいはい、俺ですが」

「鑑定が終了しましたのでお知らせに。……そうですね、4番窓口が空いておりますので、そちらまで」

3人は4番窓口まで行ったが、そこに銀行員はいなかった。あれ、と思っていると先程龍斗を呼んでいた銀行員がその場所に座った。

「では鑑定結果を報告いたします。幌馬車が一台、ナイフが10本、レザーアーマー4着……」

「あー、その辺省略でいいよ、結果だけ教えて」

「そうですか、では買い取り価格の合計は……400万8044ドルク、です」

その金額にレイア、ミアは息を飲んだ。だが龍斗は全く動じなかった。未だにこちらの金銭価値に慣れていないし、そもそも彼が最初に聞いた自身の貯金額より少ないため、ああそうとしか思わなかったのだ。額を聞いた後、龍斗は振り返って2人を見た。

「さて、じゃああんたら2人のカード貸して」

「え……承知しました」

『マイカード・オープン』

実は鑑定が終わるまでの間に、2人に銀行口座とカードを作らせていたのだ。当然戸惑っていたが、耳元で命令だと告げると2人は従わざるを得なかった。出来て間もないカードを受け取った龍斗はそれを銀行員に見せて言った。

「その金さ、この2つのカードに分けて入れることって出来るかな？」

「可能ですよ」

「じゃあ幾らだ、200万ずつ？ 平等に入れといて」

「分かりました。ではお預かりします。レイア・フォルデント・マーティス様、ミア・フォルデント・マーティス様、それぞれ20万4022ドルクですね」

「ついでに……マイカード・オープン」

龍斗は自分のカードを出現させ、銀行員の前に出した。

「俺の口座から2人の口座に、それぞれ100万ずつ、動かせる？」

「……分かりました。200万ドルクですね」

額に一瞬驚いた銀行員だったが、すぐ事務的に処理を始めた。だがレイア、ミアはまだ目を丸くしていた。

「あ、あの」

ご主人様、と言いかけたレイアだったが、その口は龍斗の人差し指と眼力で止められた。黙って見ている、という意の視線はミアにも向けられた。彼女もその意を察したらしく、開いた口を閉じて小さく頷いた。

「東龍斗様」

銀行員に声を掛けられ、龍斗はそつちに顔を戻した。3枚のカードが龍斗に返される。

「ではこちらをお返しします。東龍斗様734万2011ドルク、レイア・フォルデント・マーティス様、ミア・フォルデント・マーティス様それぞれ300万4022ドルクです。ご確認ください」

「だってよ。じゃあこれで」

「有り難うございました。またのお越しをお待ちしております」

カードをしまつと龍斗達3人は銀行を出た。馬車も一緒に売り払ったために、宿までは歩いて帰るしかない。その道中で龍斗はある看板に目を止めた。寄り道してくかと言って店内に入っていく龍斗。女性2人も入っていくとそこは仕立て屋だった。龍斗が2人の方を向いて言った。

「んじゃまあ2〜3着を選ぶといいよ。金は出しとくから」

「!!! ご、ご主人様、そ、そこまでして頂かなくても……!!!」

「あ、あの、さっきのお金がありますし……」

「気にすんな」

「しかし……」

「じゃあこれは命令だ……それと、昨日辛いこと思い出させちゃったからな。詫びのつもりということだ」

そう告げられた2人は黙るしかなかった。その後2人は店員によつて採寸され、1つ2つ生地を選んで注文した。ミアの方はレイアが選んだよりも少し上等そうな生地だったが、それでも遠慮して選んできたような感じだった。龍斗は上等な方の生地で3着ずつを注文し、現在泊まっている旅亭の名を伝えて店を出ていった。

第17話：翌日（後書き）

軽いからか直ぐ3000字いきました。心理的なもので取り敢えず分けてみます。まとめた方がいいのかなとも思っただんですがね……

第18話：龍斗の危機

「……申し訳ございません、ご主人様」

「申し訳ありません」

旅亭に戻り椅子に座った龍斗は首を傾げた。部屋に戻ってきた途端に2人が頭を下げる意味が分からなかったからだ。龍斗は素直に聞くことにした。

「何だ？ 2人して……あ、その前に顔上げる」

「はい……その、ご主人様は私たちの事をどうされるおつもりですか？」

「どうって、奴隷身分から解放したんだから、あんたらが自立するまでの面倒を見る。約束だしな」

解放した黒髪の男との約束のことを持ち出す龍斗。それを龍斗は今言ったような意味だと解釈していた。だがそう思っていたのは龍斗だけだった。

「申し訳ありませんが……私達は真血の契りで隷属を誓いました。

それはつまり、己の全てをご主人様に捧げたということになります」

「……私達はご主人様に永久隷属する身です」

「……何だと!？」

驚きのあまり龍斗は立ち上がって声を張り上げた。それに一瞬体を硬直させた2人。レイアの鳶色の眼が藍色の眼を捉えた。だがそれも一瞬のことで、すぐに視線を下げてしまった。

「真血の契りは盟約神ミスラ、契約神ヴァルナという2つの神の名に懸けて誓うものです。神の名に懸けて誓った契りを破る事は出来ません」

「……マジか……ハア」

龍斗は力が抜けたように椅子に座り直した。暫く天井を見上げていたが、やがて2人に目を向け直した。

(後を引くとは覚悟してたが……まさか永久隷属とは……仕方ない、

正直なところを話しておくか)

そう考えた龍斗は口を開いた。

「……悪いが俺には従者は必要ない。俺が元いた国、大和では俺は忍として生きてきた。忍の最優先は弱点を極力減らす事。幾ら力があつても弱点を突かれたら終いだからな。だから忍は情を無くす。たとえ幼馴染が隣で死にかかつていようと見捨てる……俺はそういう人間なんだ」

2人はただ黙って聞いていた。忍など聞き慣れぬ表現があるものの、何が言いたいのかは察しがついた。

「そういう訳だから俺は他人を従えるような器じゃない。取り敢えず考えといてくれないか、俺から離れて暮らしていく方法を。こっちはあんたらを解放するように言えば……!! ぐっ、ああ……ちっ、こんな、時に……うああ……!!」

龍斗は突然椅子から転げ落ちた。頭を抱え、うめき声を上げながら床で身悶える。ただならぬ容態に驚く2人。

『ご主人様!?』

「!! 来るな!!」

「し、しかし!!」

龍斗の身を案じた2人が近付こうとするのを左手を出して止めた。龍斗の顔を見た2人は背筋が凍った。苦悶の表情を浮かべる龍斗の顔。だがその目は明らかに異常だった。右目はこの数日ですっかり見慣れた藍色の瞳。だが左目は充血し、血のような真紅の光を放っていた。その光には人間らしい理性など欠片もない。あるのは獣が持つような、あるいは怪物が持つような、本能的な欲しか感じ取れない凶暴な目である。

「物憑きだ……忍を目指す者に多いらしい……くっ、そして俺も例外じゃない……」

「そ、それはどのような病ですか!？」

ミアアが叫ぶように言った。本当は龍斗の傍まで行きたいのだが、来るなと命令されている以上そこから近づく事は出来ない。レイア

もまた同じである。

「ぐ……病じゃない、分からないかもしれないが、こいつは、……亡霊とか妖怪の類、が……俺の体を、のっ、取ろうとしてる……ぐあ」

『女だ!!』

龍斗の方から2つ目の声が聞こえてきた。龍斗の声ではない。それよりも低く下品な声。まるで私達が出会った奴隷商人のようだと2人に鳥肌が立つ。

「まずい、逃げろ!!」

『犯す!!』

「早く!!」

『殺す!!』

「この……」

『喰らう!!』

龍斗が何かを言う度に謎の声も主張を繰り返す。片膝をつき、息を荒げ、歯を食いしばる龍斗の様子にレイアは覚悟を決めた。

「早く……視界から、消えてくれ……ぐあ……出ないと……!!」

『喰らい尽くす!! ひたすら殺す!! 殺す!! 殺す!!』

龍斗の中で時間が止まった。先程までの痛みも、声も、何も感じなくなつた。いや、1つだけ感じるものがあつた。温度だ。龍斗を包み込むように背中に回された腕の感覚。そして左半身に感じる熱。肩甲骨の辺りには胸の双丘が当たっているが、今の龍斗にそこまでの余裕は無い。驚きに目を丸くした龍斗はそのまま視線を左に向けた。そこには透き通るような金髪に鶯色の目、他ならぬレイアの顔があつた。

「何故……逃げろと……」

「申し訳ありません、命令に背いてしまつて……しかし、御主人様の事は我が事です。御主人様は全てを1人で抱えてらっしゃいます……理由はおぼろげに把握しましたが……私達では、駄目ですか？ 私達では、支えることすら出来ませんか？」

少し震える声で台詞が止まると、今度は右側に熱を感じた。見ればミアが姉と同じように身を寄せていた。

「私も、頑張ります……お姉ちゃんよりは頼りないかもしれませんが……」

「2人共……くっ……マイカード・オープン」

再び頭痛に襲われた龍斗は自身のカードを出現させた。正面に移動してきた2人を見ながら言った。

「悪いが、2〜3日の間、この部屋には一切誰も入れるな。お前ら2人も入ってくるな。何があってもだ……それ、と……お前らは自由に生きる。奴隷じゃなく、俺がいなくても自分で考え行動する、レイア、ミアとして生きる……っ、俺の金は好きに使え。これが最後の命令だ」

『そ、それは……!!』

「いいから出ていけ!!」

龍斗の怒鳴り声に従い、レイア、ミアは部屋を出た。錠を掛ける音が鳴ると、堰を切ったようにミアが泣き始めた。うずくまる妹を腕に抱きながらレイアも静かに涙を流した。

その後暫く、この旅亭には呻き声と泣き声が空しく響きわたった。

第18話：龍斗の危機（後書き）

一日2度更新…だと…正気か ^^ ;

第19話：その後

その日の朝は珍しいことに快晴だった。窓から黄色い光が差し込み、ベッドに寝ていた龍斗を照らす。何処から飛んできたのか雀の鳴き声がよく響く。そんな平和の象徴ともいえる朝の中で龍斗は目を覚ました。はっきりしない視界で見えるのは木製の天井のみ。

（ああ、この景色にもだいたい慣れてきたな……それと、このベッドの感覚も……ん？）

龍斗は文字通り跳び起きた。掛け布団を跳ね除け、片膝をつくように家具の隙間と言った方が正しいような床で構えを取った。だがそこで有るはずのものが無いことに気付いた。素早く辺りを見回す。それが机の上にあるのを見つけ、素早く体を起こして手に握る。

だがそこで龍斗は気付いた。

（誰かいる）

気配を感じた龍斗は反射的に左手に握る棒から刃を抜き放った。いつもなら逆手に持つことが多いが、今回は普通の刀剣と同じように持っている。だがその刃は相手の喉笛に触れるか触れないかといったところでピタリと止まった。

その先には、脇差『暁』の刃の先には、突然のことに驚き目を丸くしながら、両手を頭上に上げているミアの姿があった。

その後、龍斗は脇差を鞘に納め、目に涙を溜めたミアの頭を撫でながら部屋を出た。出た瞬間にレイアと鉢合わせし、脇差と同じくらい鋭い眼で睨まれたが、事情を説明して何とか抑えてもらった。空腹感を覚えた龍斗は1階の食堂に降りて適当な席に着いた。レイア、ミアは相変わらず直立不動で待機しようとしていたので命令して反対側に座らせた。

「……にしても、やけに静かだな」

龍斗が辺りを見回すと、食堂内には3人以外誰もいなかった。不思議に思っていると不意に画面が褐色に染まった。

「そうさねえ、どっかの誰かさんが亡霊騒ぎ起こして叫びまくってたからねえ、客は全員恐れをなして逃げちまったんだよ。まったく、商売あがったりだ」

「す、すいませんでした!!」

瞬発的に立ち上がった龍斗は直ぐに腰から折れて頭を下げた。相手はこの旅亭の女将だったのだ。

「えと、ちゃんと弁償しますので」

「あんだ、東龍斗つてので間違いないかい？」

「!!……何故それを？」

旅亭は基本的に宿泊客の名前などいちいち聞かない。人数が多すぎて忘れることもあるし、昼夜問わず食事だけを利用する客も多い。宿泊客のことは止まっている部屋の番号を使って何号室の人、と呼べば事足りる。龍斗は宿を取る時にする必要のない名乗りなどしていない。故にこの女将が龍斗の名を知る機会は無かったはずである。だがその予測は外れた。

「うちら商売者は全員商人ギルドに入ってる。けど、商売つたつてピンキリさ。だからギルドの中で更にグループを作った。武器屋なら武器屋グループ、旅亭なら旅亭グループって感じでね。特に旅亭のグループメンバーは他のグループメンバーと自由に通信できる手段を持っている。そうすりゃ客との間に信用が出来る。1人で全く得体の知れない宿を探すよりか仲の良い主人が勧める宿の方が安心できるだろう？」

龍斗が頷いた。褐色の肌を持つ初老の女将は満足げに頷き返した。「でだ、あんだのことはデイベスとこから聞いてるんだよ。『迷惑料を払われる方が迷惑だから、もしそうということがあったらあんだからは受け取らないように』てねえ」

龍斗は啞然とした。まさかデイベス夫妻とこの女将が繋がっていたとは思わなかったからだ。女将はそれを見てしたり顔を作った。

「というわけで、あんたからは迷惑料は過度には要らない。少しはもらうよ、あんたら3人の宿泊代に加え、1人部屋5日分。もしそれ以外で払いたってんなら……そうだね、『除霊したからもう安心です』て張り紙でもしてもらおうかねえ。ま、その前に冷める前に食べちまいな」

豪快な笑い声と共に女将は厨房へと去っていった。テーブルに目を戻すと、さつき女将が持ってきた料理の皿が並んでいる。

「さて、食うか。頂きます」

そう言って手を合わせると、龍斗はパンを手にとって食べ始めた。しかし暫くして2人の様子を見た龍斗は軽く諫めた。

「何やってる、さつさと食べよ。冷えたの食ったって美味くないぞ」

「い、いえ、私達は……」

「奴隷がご主人様と同じ席で、まして同じ物を食べるわけには……」

今まで何度か食事の機会があつたが、2人が龍斗共に食べることは無かつた。その理由を龍斗は今初めて知つた。

(またそれが……奴隷奴隷って、命令せんかつたらマジで動かねえ……なら)

龍斗はあることを思いついた。思い立つたが吉日と龍斗は直ぐにそれを実行した。

「そうか、なら選択権を与える。すぐに飯を食うか、食わずに腹を空かせたまま過ごすか。どちらでもいいぞ。俺はどうもしない。さ、選べ」

暫くの間、龍斗は2人の反応を見ていた。命令は命令だが、その中身は自分の意志で選ぶこと。逡巡する様子が何とも可笑しかった。龍斗の予想通り、まず空腹に負けたのはミアだった。彼女が食べ始めるのを見て、こちらの反応を伺ってから漸くレイアがパンを手にとつた。出会ってから初めての3人での食事だった。

食事を終えた3人は龍斗の部屋で腰を下ろしていた。前回と同じ

で、レイア、ミアが椅子に座り、龍斗はベッドの上で胡坐をかいている。だが表情は、3人共以前より固いものとなっている。無表情の龍斗が口を開いた。

「さて……何故命令を無視した。部屋に誰も入れるな。お前らも入ってくるな。そう言ったはずだ。俺はベッドで大人しく寝た記憶はないぞ」

「はい、確かにそう承りました。なのでご命令通り3日間、部屋の中には誰も入れませんでした。私達かが部屋に入ったのはその後、4日目の朝です。ご主人様の声が途絶えていましたので何かあったのか、と」

緊張した面持ちの3人だが、レイアは毅然とした口調でそう言った。ミアは少し不安を持っていたが、姉の言葉に追従するように強い意志をたたえた目で龍斗を見る。龍斗は相変わらず無表情のまま。

「……なるほど、違反はしていないか。だが何故見捨てなかった。あの異常さを目の当たりにしてなお。奴隷だからとか言うなよ、自由な人間として生きていけと言ったはずだからな」

「……はい。……ですのでこれは私個人の意思で行った行為です。個人的にお助けしようと思っただけです」

「わ、私もです!! ……それに、今まで何の役にも立てなかったし……」

「……物憑きが来る前に話したことも覚えてるな？」

「はい」

「……ハア、もういいや、結果的にあんたらには何も無かったようだし」

そう言っただけで龍斗はベッドに寝転んだ。頭の上で手を組んでいるその姿に女性2人は戸惑いを隠せなかった。気まずい空気を何とかしようとミアが口を開いた。

「あ、あの、1つ聞いていいでしょうか？」

「ん、何だ」

「その……物憑き、とは一体、何なのでしょう？」

第20話：物憑きと……

「その……物憑き、とは一体、何なのですか？」

「！！ ちよつ、ミア、それは……！！」

単刀直入に質問してきたミアに対してレイアが慌てた。恐らくは主人である龍斗にとって苦となるもの。それを口にさせるのはまずいと考えたのだ。だが龍斗が止めたのはレイアの方だった。

「あー、レイア、別に構わないから。分からなくて当然だからな、どうせならちゃんと教えよう」

「……分かりました」

妹の方を向いていたレイアは姿勢を正して座り直した。龍斗も腹筋を使ってベッドから体を起こし、胡坐の状態に座り直す。

「始めに確認したいんだが……亡霊とか妖怪とかいうの分かるか？」
「ヨウカイ、は分かりませんが……亡霊というのは、死後人間の魂が現世に留まり、実体化する『ゴースト』のことですね？ それならどこの大陸でも伝説が残っております。実際に見た人もいます。ですが、あまり信憑性のない話ばかりです」

意外なことに姉よりも妹の方が早かった。龍斗は首を縦に振った。
「そうか、こつちでは亡霊か。^{ゴースト}早い話そのゴーストが俺に憑りついて俺の体に乗っ取るうとしていたんだ。それが『物憑き』だ」

そう説明するとレイアはにわか信じがたいといった様子で眉を顰めた。一方ミアは顔を青くした。

「そ、それって、ゴーストに呪い殺されるということですか」

「いや、死にはしない、こともないのか。あいつが勝って俺の体を完全に支配するようになれば、今こうしてあんたらと話してる東龍斗という人格は消えるからな。2人共聞かなかったか？ 俺じゃない、誰か別の奴の声を」

2人が首を縦に振った。その体には鳥肌が立っている。

「なら、奴が何を言ってたかも聞いてるよな。『殺す』『喰らう』」

『犯す』……奴はそういう欲の塊だ。正直あんたらがない方が抑えやすかった。故に命令でも何でもいいから出ていってもらった。

……すまなかった」

「い、いえ、奴隷が命令を聞くのは当然のことなので」

「そ、そうですよ!!」

頭を下げる龍斗に2人が慌てて声を出す。立ち上がろうとした2人だったが、続く言葉に力を失った。

「あんたらを巻き込むのは避けたかった。他の誰かを巻き込むのだけは、避けたかった」

部屋の空気がさらに重みを増した。まるで肩に鉛を乗せているように感じる。かなり逡巡した様子のレイアが口を開く。

「……やはりご主人様が抱えていらっしゃるものは、1人では重すぎるものですね……でも私達の力ではお役に立てないのですよね……」

そう言って顔を伏せた。再び鉛の空気が支配するかと思われたその時、龍斗の言葉が空気を変えた。

「いや、役には立ってると思うぞ」

「……え？ で、でも……」

驚きのあまりレイアは声が出なかった。ミーアは途中で言葉を止めたが、2人のは同じことを思っていた。

(私達は何もしていないのに……)

それを察した龍斗は苦笑しながら言った。

「流石に今回は俺もやばかった。奴に飲み込まれるか、そうでなければ俺ごと死んでいただろうな。何せ、俺は気付けで自分の手首を切っていたんだから」

レイア達は4日目の朝、龍斗の部屋に入った時の事を思い出した。部屋中に鉄臭さが漂い、床には右手に脇差を持ち、左手首から血を流す龍斗の姿。彼が死んだと思ったミーアが泣きそうになるのを制

し、レイアが脈を測ったところで初めて龍斗がまだ生きていると確認できた。流れた血の量から考えると少しでも遅れていたら危なかったかもしれない。

「……それでも、前の俺ならしなかったな。奴との戦いにてめえの命かけるなんてな。今回それが出来たのはあんたらのことが頭にあったからだ。自分でもよく分からんが、奴があんたら2人を標的にした瞬間、俺は躊躇いなく刃を抜いてた。初めて知ったよ。血が抜けていくのと同時にあいつの力も弱っていった。直接じゃないが、今回あんたらは物憑きから俺を救ってくれた、命の恩人なんだよ」
「ありがとう、と龍斗は再び頭を下げた。だが彼が顔を上げると2人は同時に溜息をついた。レイアが言う。

「物憑きを払うお役に立てたと言って下さるのは恐縮ですが、そのお陰で失血死寸前だったわけですから。結果から申し上げると喜べません」

「ふむ……そういやそうだな。まあ、終わり良ければ全て良し、てことで」

「全然良くありません!!」

龍斗の言葉にいち早く反応したミアアが叫び、室内の時間が止まった。

「ク、ククク……」

「フフ、フフフフ……」

誰からともなく笑いが始まった。

「……ところで、その、私達はどうすれば良いのでしょうか」

場が治まったところでレイアが曖昧な質問をしてきた。龍斗は首を傾げた。

「ん？ どういうことだ？」

「いえ、その……ご主人様はご自分の死を予想されて……そうならば命令する者がいなくなる私達の身を案じてあのような命令をされ

たのですよね？」

「その、結果的にそうならなかったのですから……私達は奴隷です。ご主人様にお仕えする義務が」

「あー、それなんだがな」

龍斗は渋い顔で頭を掻いた。そして続ける。

「俺は自分が言ったことの責任はちゃんと持つ主義だ。だからあの時言った最後の命令つてのは撤回しない。これからどうするかは自分らで決めてくれ。俺は……っか、最初からだけどあんたらを奴隷とは思っていない。ま、それだけだ」

龍斗がそう言うのと姉妹はひどく困惑した様子でこちらを見ていた。やがて後ろを向いて2人でこそそ話し合いを始めた。『即応の霧』を発動させて会話を聞き取るうかとも思った龍斗だったが、結局それをすることは無かった。

「ご主人様、よろしいでしょうか？」

「んあ？ ああ、結論出たか？」

腕を組み壁にもたれていた龍斗は重心を前にずらした。姉妹は互いを見ると最終確認で頷き合い、声を揃えて言った。

『私達は最後までご主人様にお仕え致します。有事の際には全力でお守りいたします』

「……ハア、まさかこんなことになるとはなあ。後悔先に立たず。言つとくが、命の保証はしないぞ」

「構いません。奴隷に身を落とした時から覚悟はしていました」

「それに、私達にはもう失うものはありませんし」
藍色の眼が2人の顔を注視した。そこには迷いが無かった。完全に腹を括り、覚悟を決めた者の顔があった。そこに嘘偽りのないことを見て取った龍斗は口を歪めた。

「フフ、ああそうかい。ならもう何も言わない。たださっきも言った通り、あんたらを奴隷とは見ていない。そして、俺は女にほいほ

い死んでもらうほど薄情じゃない。仕えてもらおうとも思っていない。あんたらに守られるほど弱くもないが……どうするか……んー……なら、家族みたいなもんとして扱うかね」

「え、家族……ですか!？」

「そ、そんなもつたいない」

「なら選択肢を与えよう。俺と対等の人間としてついてくるのか、ここでお別れか」

「うっ……」

レイアが言葉を詰まらせた。再び視線を交わした姉妹はまた頷き合ってしまった。

『承知致しました』

その返答に大きく頷いた龍斗は言う。

「なら色々改善しないとな。まず対等な人間なんだから俺をご主人様と呼ばないこと。それから人間としての全権があるから、意に沿わなかったら楯突いてよし。食事も態々わわわわ分ける必要もないし……そうかこれで妹2人か。ミアアが13、レイアが15か。あ、俺も……あ」

突然並べられる要求に慌てていた2人だったが、奇妙な声を上げたところで龍斗に注目した。彼はレイアに聞いた。

「今日って何日だ?」

「確か、10月30日ですが」

「あー……自分の生まれた日忘れてたな……いつの間にか16か俺は」

第20話：物憑きと……（後書き）

評価とかお気に入り登録数とかの数字が目に見えて上がってます。
ホント恐縮です。皆さん有難うございます。

第21話：レイアの夜

妹が寝静まるのを確認すると、私は音を立てないようにゆっくり歩いて部屋を出た。1つは手に持つ燭台の火を消さないようにするため。もう1つは今寝たばかりの妹を起こさないようにするため。蝶番が鳴らないように扉を開け、部屋の外へと左足を出した。

しかし体重をかけた瞬間、木製の床が軋んで音が出ってしまった。私は慌てて室内を見た。……良かった、今の音で起きた様子はない。ほっと胸を撫で下ろし慎重に扉を閉めた。蠟燭片手に廊下を歩くのだけれど、またさつきみたいに音が鳴らないかと心配になり、自然歩みが遅くなってしまう。……念のため断っておくと、私は別に太って体重が重いわけではない。幼少の頃から様々な面で気を使ってきたためにそれなりに見目の良い容姿であると密かに自負している。しかしまさか、それを後悔する日が来るとは思わなかった。どうしてこうなったのだろう。父も母も殺されたのに何故私達だけ残され、奴隷にされたのか？ 答えは簡単。海賊が容姿を見て金になると言った、容姿ゆえに売られて奴隷にされ、また容姿を気に入られたが故に買われ……つまり、このような結果になったのは全てこの容姿が生んだ結果。どうしてこうなったのだろう。キリが無いとわかっていても、何度も考えずにはいられなかった。

私は旅亭から出て建物の裏手へ回った。酒場の明かりだろうか、夜だというのにあちらこちらに明りがある。今出てきた旅亭も夜は酒場として営業しているらしく、食堂の方から野太い声と光が漏れてきている。表側は通りに面しているけど、その裏側には何も無い。敢えて言うならば、大きな木が一本と、昼間は子供たちの遊び場となる何もない土地だけ。数年前に商人が何かを建てようとしていたけど、ある日盗賊に襲撃されて死亡。計画は頓挫し、以来手つかず

く見えないけれど、あまりいい顔はしていらっしやらないだろう。何故なら。

「ハア……あんま変わってないだろそれ。身内にそんなこと言う奴俺は知らないぞ」

そう、この人は主人扱いされることを嫌っている。もつと言えば、奴隷制度そのものを嫌っている。あの人にとって私達は最初からただの人だった。でも、私たちにとってあの人はそうじゃない。家族も家も、何もかもを失い、拳句この我が身すら失いかけていた絶望の中から救ってくれた人。あの日以来、与えられることの無かったものを与えてくれた人。物憑きの一件。あんなことがあったのに、あんなことの真ただ中というのに、私達の身を案じて守ろうとしてくれた人。この人からして頂いたことはどれも身に余る、感謝してもし足りないことばかり。私はこのご恩を忘れたくない。……だからこそ。

「なら、ここにいます。幾ら龍斗様の頼みでも変えるつもりはありませんので」

「確かにお前の自由だが……何も敬語使わんでも……なあ、ミアア？」

あの人は振り返ることもなくそう言った。振り返ってみると、そこには確かにミアアがいた。建物の影から出した顔と手が、月の光を浴びて白く輝いて見える。その顔は私と同じ、驚きで目を丸くしている。もっともその理由は正反対。ミアアは気づかれたことに、私は気付かなかったことに。

「あ、えと、ごめんなさい。音がしたから目が覚めちゃって、そしてたらお姉ちゃんがどこかへ行くのが見えたからそれについてきて……おお、お邪魔してすみません!!」

「別に邪魔じゃないからいいさ。レイアが来たのだから予想外だ。別に俺が呼び出したわけじゃないし」

「そ、そうですか」

ほっとした様子の妹はそのまま私の隣まで来た。そこで肝心なこ

とに気付いた私はあの人を見上げた。

「ところで龍斗様は何故こんな時間にこんな場所に？」

「ああ、ちよつと昔のことを思い出してな。軽い月見に来ただけだ」
私はその視線の先へと顔を向けた。……そこには半円の白い月があった。暫くして、目だけを動かしてあの人を見てみた。月光に照らされ、浮き彫りになったあの人を藍色の眼で見ていると、不思議と気持ちが落ち着いてきた。向こうがこちらに気付いている様子はなく、私はまた月に目を戻した。気付いていたとしてもあの方はきつと気にしない。

……何故だろう。あれほど心を占めていた後悔の念が今はあまり感じられない。いつの間にか重い荷物が肩から降りている。これもあの人のお陰なのだろうか。

「さて、そろそろ戻るか。お前らも、夜更かしは女の敵だぞ？」

『はい』

あの方は木から飛び降りた。私とミアはその背中を追っていった。

第21話：レイアの夜（後書き）

女性1人称って難しいね、うん。しかも大して意味の無い話です。すいません。まあ、練習回としてお見逃しください

第22話：魔法とは 1

旅亭の裏にある何も無い広場。商人が何かを建てようとして整備されたものの、計画が頓挫して放置状態となっている場所である。普段なら近所の子供達が走り回って遊んでいるのだが、その子供たちは今建物の屋根の下でただ呆然としていた。彼らが何故そのようなことになっているのか。それはその目の前に広がる光景を見れば明らかだった。

「無常の闇を斬り裂かん、『暁』」

龍斗は脇差を抜いて相手が繰り出した槍の軌道を逸らせた。それが地面に当たるのを見届ける前に龍斗は上体を後ろに反らす。先程まで彼の首があつたところにまた別の槍が繰り出されていた。そのままブリッジをするように手をつけて、足を跳ね上げ槍を蹴る。勢いそのままに後転し、体を起こしたところに2本の槍が同時に、左右から挟み撃ちの薙ぎでその胴体を狙う。跳躍することでかわした龍斗だが、すぐにその判断がまずいことに気付く。

「やべっ」

「隙ありです!!」

槍は平行になったところでピタリと止まり、そのまま上へと突き上げられた。空中では人間はまともに身動きできない。その隙をついた攻撃で、普通に行けば確実に一撃を入れられる。

だが龍斗は体を捻り、2本槍の間に体を納めることで場をしのぎ、着地と同時に脇差の柄を口に咥え、槍を持つ2人の間へと突進する。2人が槍を振り下ろす。だが既に槍の交差点より内側に龍斗の侵入を許している。龍斗は両手を広げ、2人の首を掴んだ。

「……参りました」

槍を持った2人、レイア、ミアは脱力して槍を手放した。

「ああ、危なかった。危うく刺殺されるとこだった」

元気に走り回る子供達を見ながら、龍斗が水で喉を潤す。その左隣にはレイア、ミアが並んで座り、彼と同じ水が入った木製のコップを持っている。ミアが口を開いた。

「いえ、私たちなどとても。龍斗様の方が凄いですよ。まさか槍2本とやりあつて勝つてしまふなんて」

「ハハハ、いや、あれは本当に運が良かった。確かに槍はリーチ長いし、2体1もきついが、手加減されてりゃあ、な」

うつ、とミアが呻き声を出した。忍として何度も死線をかいくぐつてきた龍斗の眼からすれば、さつき姉妹が見せた槍捌きは随分と甘いものである。例えば龍斗が空中に逃げた時。本気で仕留めようとするとすれば、穂先を上げて斬るのではなく腹や胸に突きを入れてくるだろう。幾ら命を狙うつもりで、と予告していたとしてもやはり仕える相手に攻撃するとなると心理的ブレイキがかかるものなのだ。

「朝話を聞いた時には半信半疑だったが……本当に強いんだな」

「私達の家は代々王国直属の騎士を輩出する武家の名門でしたので。女と言えどそれなりに武芸を身につけております。初めてお会いしたときに一緒にいた……あの黒髪の男性の言葉を覚えていらっしやいますか？」

レイアの言葉で龍斗は瞬時に思い出した。姉妹と共に馬車の中にいた、黒髪黒目の元奴隷の男の事である。他とは何かが違うと感じ、ずっと印象に残っていた。

「ああ、そついや言つてたな。5人全員戦奴隷だ、とか何とか」

「そついうことです。……もつとも、私達の場合はそれだけではなかつたでしょうが……」

2人の気が沈むのを感じ取つた龍斗。これはまずいと話題をその男のことにする。

「あ、そ、そついやあの男なんか色々引つかかるんだよなー。態度や口調もそうだが魔法が使えるとか何とか」

『……え!?!』

龍斗の言葉に2人は驚いた。が、2人が驚く理由が分からない龍斗はきよとんとするだけだった。

「ん、どうした?」

「龍斗様、あの方は本当に魔法が使えるのですか?」

「ああ、お前らが連れ去られた後追いかける時に、なんて言ってたか……『風の精霊シルフよ、我らに力を、フェアウィンド』だっけ」
姉妹は顔を見合わせた。目を丸くしたままレイアが龍斗の方を見る。

「……それは確かに呪文ですね。となると、やはりそれなりの身分だったのでしょうか……?」

「ちよつと待て。……あの時の様子、そんで今の言い様だと……魔法ってのはそう簡単に使えるものではないのか? いやそもそも魔法ってなんだ?」

「……ご存じないのですか?」

「小さな島国に魔法なんてものは無かった。大陸出身の母さんから聞いた覚えはないな……」

物憑きが去って目覚めた後、龍斗は自らの過去について姉妹に語っていた。龍斗は基本的に自分の情報を他人に与えることはしない。しかし身内として扱う以上この2人には話しておく方が良くと判断したのだ。その反応と云えば、龍斗が姉妹の経歴を聞いた時よりも随分オーバーだった。もつともこれは、感情を表に出さない訓練を積んできた者とそうでない者との比較なので仕方のないことである。そんなことを軽く思い出している頃にレイアが説明を始めた。

「魔法というのは……簡単に言えば、神に祈りを捧げる代償に神の力を具現化したもの、ということでしょうか?」

「……すまん、分からん」

「でしようね……」

そうして2人で考えあぐねているとミアが目の前に移動してきた。そして口を開く。

「だったらまず、見てもらうのが早いのでは？」

「……なるほど。龍斗様、如何でしょうか？」

「ふむ、百聞は一見に如かず。その方が早いかもしれんな。頼めるか？」

「はい！！！」

2人は満面の笑みで返事を返した。

第22話：魔法とは 1（後書き）

ユニークが2800超え

読んで下さる皆様有難うございます。

第23話：魔法とは 2

「火の精霊サラマンダーよ、我が求めに応じその力をここに示せ、
『ファイア発火』」

ミアが伸ばした右手の先に突然何の前触れもなく炎が上がった。焚き火程度の炎が、消えることなく地面の上で揺れている。龍斗は目を見張った。

「ほう、すげえな。焚き木も火種も無しに」

「ありがとうございます。といつてもただ発火させただけなので。下級魔法ですけど」

褒められたことで笑顔になったミア。場所はもちろん旅亭の裏にあるただの広場。ただし他人を巻き込まないようにと森の近くまで移動している。ミアは顔を崩さないまま説明した。

「このように、呪文を唱えて一定の魔力を消費することで魔法が発動します」

「出た火はそのままか……で、このままだと山火事じゃないか？」

「ご安心下さい。私が消火いたしますので」

そういうと今度はレイアが両腕を上に向けた。

「水の精霊ウンディーネよ、我が求めに応じよ。汝の水の力を以てこれを滅さん、『ウォーターボール水球』」

空中で何かが弾けたかと思うと、そこには大量の水が浮かんでいた。レイアの腕が下ろされると同時にその水も下に動き、ミアが出した炎の上へと落ちていく。小さな音と共に炎が消えた。それでも水が消えたわけではなく、まだ半分ほどの量が空中に浮かんでいる。水の球体は龍斗のそばを通り過ぎる。それを目で追っていくと最終的にレイア的手中に収まっていた。

「術にもよりますが、下級魔法であればこのくらいの操作も可能となります。これが詠唱魔法と呼ばれるものです」

そう言うとレイアは両手を叩いた。パンツという音と共に水球は

姿を消した。

「はあー、便利なもんだな。あ、そういや呪文ってのはいちいち違うもんなのか？」

「はい、火を操るなら火の精霊、風を操るなら風の精霊、とどの属性を使うかによって祈りを捧げる対象は変わってきます」

「……なるほどねえ。けど、何か引つかかるな……発動させる条件って何だ？」

「はい、条件としては2つあります。1つは呪文を唱えること。そしてもう1つが魔力を消費することです」

「……魔力？」

龍斗は腕を組み、首を傾げた。レイアが説明を続ける。

「魔法を使用する時に必要となる力の事です。例えば走る、跳ぶ、剣を振る、といった動作をするには体力を消費しますよね。それと同じで、魔法を扱うには魔法を扱うための力を消費する必要があるのです。人によっては霊気、生氣、などと呼ぶこともあるらしいですが」

「ふーん……ん？ 霊気……気？」

レイアの言葉に引つかかるものを感じた龍斗だが、ひとまず流すことにして不思議そうに眺めている姉妹に続きを促した。

「あ、いや何でもなし。んで？ 確か魔法は3つあるんだよね。1つがさっきの詠唱魔法、残りは何？」

「あ、はい。もう1つは回復系、です。これは魔力によって傷を治したり、体力を回復したりするものです。自身の回復はもちろんな魔力を送ることで他の人の回復も可能です。効果は……既に体験されている通りです」

ミーアの言葉を聞いて龍斗は左腕の袖をまくった。物憑きの際、彼は自分で自分の手首を切っている。だが今その時の傷は何処にも見当たらない。気絶していた間に2人から回復魔法を掛けられたため実感はないのだが、自分で切り付けた傷を見間違うはずがない。それが跡形もなく消えているのはやはり回復魔法の効果なのだろう。

因みにこの魔法、切り落とされてさほど時間が経っていないならまだ繋がる望みもあるらしいが、無いものを再生するということは不可能だという。

「そしてもう一つ。これは正確には魔法と呼んで良いのかどうか分かりませんが……一般に強化系と呼ばれるものがあります」

「強化系？」

「はい、これは文字通り魔力を体の強化に使うものです。一番多いのは筋力強化でしょう。実は私達が自在に槍を操れるのもこの強化の恩恵を受けていたりします」

「なるほどな。さほど筋肉があるように見えないのに、よく槍が振るえると思っただらそういうことか」

「……なんか軽く馬鹿にされてるような気がするのですが……」

「気のせいだろ。そうか、魔力、霊気か……気……気？ あっ、待てよ、もしかしたら……なあ、その強化系つてのでさ、感覚を強化することはできないか？」

「感覚……ですか。少々お待ちを」

先程引っかけたことを思い出した龍斗の要求にレイアが答えた。彼女は静かに目を閉じると、1つ息を吐いた。すぐに龍斗は変化を感じ取った。

(これは……!!)

龍斗は足元に気配を感じ、地面を見た。だがそこには特に何かがあるわけではない。目に見えるのは土だけだ。顔を上げるとレイアはこちらを指さしていた。

「感覚を強化しました。これで目を閉じていても相手がどこにいるか分かります」

試しに龍斗は数歩動いては止まり、動いては止まりを繰り返した。それに合わせてレイアの指も動き、龍斗がいる位置を正確に指してくる。真後ろに回ってもちゃんと指してきた。そこで今度は後ろに下がる。暫くはこちらを指さしたままだったが、あるところを境にレイアは腕を下ろしてしまった。

(なるほど、ここが感知できる限界か)

龍斗は足元に転がっている少し大きめの石をいくつか拾い、レイアに当てない程度に適当に放り投げる。

「これは……石ですか？」

「そう正解」

「ひゃっ!？」

レイアは思わず身をすくめた。突然後ろから声を掛けられたからである。レイアが振り向くとそこには龍斗が悪戯を成功させた子供のような、意地の悪い笑みを浮かべて立っていた。レイアは驚いた。一度真後ろに來られた時はちゃんと感じ取った。だが今回は、一切気配を見せずに背後に立って見せたのだ。

「そ、そんな、いつの間に」

信じられないものを見たような様子のレイアに龍斗は種明かしをした。

「簡単なことだ。この感覚強化は地面の上にしかなら効果が無いんだよ。だからさっき投げた石の上を歩けば感知されずに済む」

「へえ、そうなんですか……あれ？ 龍斗様確か魔法については何も……」

「ああそうだ。確かに俺は大陸に來るまで魔法というものを知らなかった。だがこれは知ってる感覚だ。忍術の1つ、意識を気に乗せて周囲に分散させ、気配を探る『即応の霧』の失敗版。そうか、気か。そういうことか」

納得した声を上げる龍斗。1人呟くその声は、首を傾げる姉妹にも聞こえていた。

「ああそうか……忍術は、妖術は、夢物語のような力の数々は……『魔法』だったのか」

第23話：魔法とは 2（後書き）

いつも読んでくださっている皆様ありがとうございます。
不定期更新ですが、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0606y/>

龍の逆鱗

2011年12月8日23時52分発行